美里町文化財調査報告書第４集

成　田　遺　跡

平成20年３月

宮城県美里町教育委員会

成　田　遺　跡

序　　文

美里町には豊かな自然のなか、国指定史跡「山前遺跡」、町指定民俗文化財「関根神楽」などをはじめとした歴史遺産が数多く存在し、大切に守り伝えられてきました。特に埋蔵文化財については縄文時代から近世に至るまでのおおよそ50箇所の存在が知られ、この埋蔵文化財から連綿と続く地域の人間活動の歴史を知ることができます。これら文化遺産は町民はもとより国民共有の貴重な財産であり、次世代に継承していくことが今に生きる我々の重大な責務であります。

しかしながら、人間の生活様式や活動範囲が時代の変遷とともに変化するのに伴い、文化遺産を取り巻く現状も変化してきました。特に埋蔵文化財は土地との結びつきが強いことから、年々激化する大規模な土地区画整理や個人住宅建設などの各種開発事業のために、破壊・消滅の危機に晒されることが多くなっております。

このような中、当教育委員会では、関係開発機関との十分な協議を重ね、貴重な埋蔵文化財を調査・保存し、積極的な保護に努めるとともに、その成果を生涯学習などに活用することで、後世に伝えることに努めているところであります。

本書は、県営経営体育成基盤整備事業中埣西部地区のほ場整備事業に伴い平成18年に実施した成田遺跡の発掘調査の成果をまとめたものです。これら成果が地域の歴史的解明と文化財保護思想の高揚のために役立てていただければ幸いです。

このたびの調査にあたりまして、宮城県教育庁文化財保護課には職員の派遣等、絶大なるご指導、ご支援を頂きましたこと、改めて心から感謝申し上げます。また、現地で調査作業に当たられた方々、関係機関の皆様に厚く御礼申し上げます。ここに関係各位に対して慎んで敬意を表するとともに、今後も皆様のご指導、ご協力を賜りますことをお願い申し上げる次第です。

平成20年３月

美里町教育委員会
教育長　宮　嶋　　健

例　　言

1．本書は、美里町中埣西部地区の県営ほ場整備事業に伴う『成田遺跡』の発掘調査報告書である。

2．発掘調査は美里町教育委員会（確認調査は宮城県教育委員会）が主体となり、美里町教育委員会・宮城県教育庁文化財保護課が担当した。

3．発掘調査および本報告書の作成に当たっては、各関係者および以下の方々からご協力・ご教示をいただいた（敬称略）。

吾妻俊典（名取高校）　車田 敦（大崎市教育委員会）　古川一明（宮城県多賀城跡調査研究所）

4．本書に使用した各遺跡の位置図は、国土交通省国土地理院発行の縮尺＝1/25,000の地形図を複製して作成した。

5．本書における土色の記述については、『新版 標準土色帖 1994年版』（小山・竹原 1994）を用いている。

6．測量原点の座標値は、世界測地系にもとづく平面直角座標第Ｘ系による。

7．本書で使用した遺構略号は以下の通りである。

SD：方形周溝跡･溝跡　SE：井戸跡　SK：墓壙･土坑　SX：湿地･その他

8．本書は、調査を担当した各調査員の協議を経て、岩渕竜也（美里町教育委員会）、佐久間光平（宮城県教育委員会）が執筆・編集した。

9．発掘調査の記録や出土遺物は美里町教育委員会が一括して保管している。

調 査 要 項

遺 跡 名：成田（なりた）遺跡（宮城県遺跡地名表登載番号：39051　遺跡記号：ＲＮ）

所 在 地：宮城県遠田郡美里町中埣字成田

調査原因：県営ほ場整備事業

調査主体：美里町教育委員会

調査担当：美里町教育委員会・宮城県教育庁文化財保護課

確認調査（県主体）：（県）佐藤則之　須田良平　千葉直樹

（町）岩渕竜也

本 調 査：（町）岩渕竜也

（県）佐藤則之　須田良平　佐久間光平　佐藤貴志

調査期間：確認調査：平成17年10月31日～11月２日

本 調 査：平成18年８月28日～11月21日

調査面積：確認調査：700㎡　　本 調 査：2,800㎡

調査協力：宮城県大崎地方振興事務所

目　　次

序　文

例　言・調査要項

目　次

第Ⅰ章　調査に至る経緯 …… 1

第Ⅱ章　遺跡の概要 …… 1

1．遺跡の位置と地理的環境 …… 1

2．周辺の遺跡 …… 3

第Ⅲ章　発掘調査 …… 4

1．確認調査について …… 4

2．本調査の方法と経過 …… 4

3．基本層序 …… 7

4．検出遺構と遺物 …… 8

(1) 古墳時代（前期） …… 8

1）検出状況 …… 8

2）遺構と遺物 …… 8

A．方形周溝跡　B．溝跡　C．溝状遺構　D．土坑　E．湿地（遺物包含層）

F．その他の出土遺物

(2) 中世 …… 25

1）検出状況 …… 25

2）遺構と遺物 …… 27

A．溝跡

(3) 近世・近代以降 …… 28

1）検出状況 …… 28

2）遺構と遺物 …… 28

A．掘立柱建物跡　B．大溝跡・溝跡　C．井戸跡　D．墓壙　E．土坑

(4) その他 …… 30

第Ⅳ章　総　括 …… 31

1．古墳時代（前期） …… 31

2．中世 …… 35

3．近世・近代以降 …… 35

引用・参考文献

写真図版

報告書抄録

第Ⅰ章　調査に至る経緯

宮城県は旧小牛田町（美里町）および旧古川市（大崎市）の中埣西部地区において、耕地の汎用化や農地利用集積に対応していくため、生産基盤の整備を行うこととなった。これを受けて、平成10年３月に県文化財保護課と旧小牛田町（美里町）教育委員会は当該地区の分布調査をおこなった。その結果、旧古川市長岡針遺跡の南に隣接する旧小牛田町側の耕作地で遺物が採集され、さらに南へ遺跡が広がることが判明したことから、長岡針遺跡の南側（旧小牛田町）の遺跡範囲を新たに「成田遺跡」として登録することとなった。

平成11年に「中埣西部地区ほ場整備事業区画整理計画」が採択され、その後平成17年には旧宮城県古川地方振興事務所（大崎市地方振興事務所）から遺跡との関わりについて協議書が提出された。これを受けて、平成17年６月15日に県文化財保護課・旧小牛田町教育委員会・旧古川市教育委員会、旧宮城県古川地方振興事務所の４者が協議を行い、「成田遺跡」（旧小牛田町）・長岡針遺跡（旧古川市）の範囲や遺構の分布状況を把握するため、確認調査を実施することとなった。平成17年10月24日～10月26日には県文化財保護課が確認調査を行い、古墳時代の溝跡や土師器などの遺物を検出した。このため再度協議を行い、一部については計画変更により現状保存することとなったが、水路部分や新設道路部分については平成18年度に事前調査を実施することになった。事前調査は、南側の「成田遺跡」については美里町教育委員会、北側の「長岡針遺跡」については大崎市教育委員会が主体で実施することとなった。

第１図　成田遺跡の位置

こうした経緯を経て、平成18年８月28日～11月21日の間、県文化財保護課の協力の下、美里町教育委員会が担当して成田遺跡の本調査を実施した。

第Ⅱ章　遺跡の概要

１．遺跡の位置と地理的環境

宮城県遠田郡美里町（平成18年１月１日、旧小牛田町と旧南郷町が合併）は、仙台市から北東に約40km離れた県北中央部に位置し、地理的には江合川や鳴瀬川が流れる大崎平野東縁部にある（第１図）。南には大松沢丘陵、北には清滝丘陵、箆岳丘陵が西から東へ延びており、これらの間を江合川と鳴瀬川が東流する。両河川の間には標高15～30mほどの低丘陵が残っており、また、両河川沿いと低地内には東西あるいは北西－南東方向に延びる自然堤防が発達している。

(S=1/40,000)

No.	遺跡名	立地	種別	時代	No.	遺跡名	立地	種別	時代
1	成田・長岡針遺跡	自然堤防	集落・散布地	縄文・古墳前・奈良・平安・中世・近世	19	神明遺跡	自然堤防	散布地	古代
2	的場遺跡	自然堤防	散布地	古代	20	団子山西遺跡	自然堤防	散布地	縄文晩
3	谷陽院遺跡	自然堤防	散布地	古代	21	田尻小学校西遺跡	自然堤防	散布地	縄文晩
4	山王遺跡	自然堤防	散布地	古代	22	お椀子山遺跡	自然堤防	散布地	縄文晩・古墳前・古代
5	中田遺跡	自然堤防	散布地	古代	23	通木山崎遺跡	自然堤防	散布地	平安
6	町遺跡	自然堤防	散布地	古代	24	通木田中前遺跡	沖積地	散布地	古代
7	十二神遺跡	自然堤防	散布地	古代	25	通木城跡	自然堤防	城館	中世
8	練布川遺跡	自然堤防	散布地	古代	26	新田柵跡	丘陵	城柵	古代
9	上埣遺跡	自然堤防	散布地	古代	27	留沼遺跡	自然堤防	集落	古墳前・中
10	渕尻遺跡	自然堤防	散布地	古墳中	28	日向前横穴墓群	丘陵麓	横穴墓	古墳・平安
11	御館跡	自然堤防	城館	中世	29	筒水横穴墓群	丘陵	横穴墓	古墳
12	休塚館跡	自然堤防	城館	中世	30	宮沼遺跡	丘陵	散布地	古代
13	稲荷遺跡	自然堤防	散布地	古代	31	諏訪遺跡	丘陵	散布地	古代
14	馬放B遺跡	自然堤防	散布地	古代	32	北小松遺跡	丘陵・沖積地	散布地	縄文晩
15	馬放館跡・馬放A遺跡	自然堤防	城館・散布地	古代・中世	33	権現山遺跡	丘陵	集落	古代
16	李埣城跡	自然堤防	城館	中世	34	沼木館跡	丘陵	城館	中世
17	谷地館跡	自然堤防	城館	中世	35	天神山遺跡	丘陵	散布地	古代
18	忠全寺跡	自然堤防	寺院		36	天神西横穴墓群	丘陵麓	横穴墓	古墳後

第２図　成田遺跡の位置と周辺の遺跡

成田遺跡は遠田郡美里町中埣字成田に所在し、美里町役場の北西約７kmに位置する（第２図）。この成田地区は美里町の北西端にあたり、北は大崎市古川長岡針地区に、南は同じく大崎市古川馬櫛・上埣地区に接する。その大部分は江合川と田尻川に挟まれた沖積地で、平坦な水田地帯の中に集落が点在する標高16～17mほどの自然堤防が形成されている。成田遺跡はこの自然堤防上に広がっているが、第２図に示したように遺跡の北は大崎市側へと延びており、北側は長岡針遺跡（大崎市）として登録されている（註１）。成田遺跡と長岡針遺跡を合わせた遺跡範囲は東西約300m、南北約400mほどの広がりを持つ。遺跡は「古代の散布地」として登録されているが、これまで本格的な発掘調査はなされていない。

註１．美里町の「成田遺跡」と大崎市の「長岡針遺跡」は行政上の境界で区分されているだけで、地形的には同じ自然堤防上にあることから、遺跡としては一連のものと考えられる。

２．周辺の遺跡

成田遺跡周辺では、江合川流域の自然堤防上に遺跡がいくつか点在するものの、その分布は希薄である。調査された遺跡もほとんどなく、遺跡の詳細については不明なものが多い。ただ、北方約２～３kmの田尻川流域の自然堤防上や丘陵およびその縁辺部には遺跡が比較的多く、縄文時代、古墳時代、奈良・平安時代、中世などの遺跡が分布しており、特に古墳～奈良・平安時代の遺跡が目立っている（第２図）。

古墳時代の遺跡をみると、江合川や田尻川の自然堤防上には北約２ｋｍに前期のお椀子山遺跡(22)、西約2.5ｋｍには中期の渕尻遺跡（10)、江合川を挟んで南西約3.5kmには前～中期の留沼遺跡（27)などの遺跡がある。留沼遺跡では前期の竪穴住居跡、前期～中期の水田跡などが検出され、当該期の居住域と生産域が確認された遺跡として注目されている（宮城県教育委員会 1980a、古川市教育委員会 1999)。一方、北方の丘陵縁辺部には、前期古墳の周溝とみられる大溝跡が確認された新田柵跡(26：田尻町教育委員会 2001)、また、後期の日向前横穴墓群（28：宮城県教育委員会 1981b)、筒水横穴墓群（29)、天神西横穴墓群（36）などが分布する。大溝に区画された前期の集落跡として著名な美里町の国史跡「山前遺跡」(小牛田町教育委員会 1976）は、本遺跡から南東へ約７kmの低丘陵上に所在する。

古代の遺跡では、江合川流域の自然堤防上に的場遺跡（２)、谷陽院遺跡（３)、山王遺跡（４)、田尻川流域の自然堤防上に神明遺跡（19)、通木山崎遺跡（23）などがみられる。北方の丘陵上やその縁辺部には古代の城柵跡として知られている新田柵跡（26)、城柵・官衙関連遺跡の権現山遺跡(33)、集落跡とみられる諏訪遺跡（31)、宮沼遺跡（30)、天神山遺跡（35）などがある。

中世では、自然堤防上や丘陵上に御館跡（11)、馬放館跡（15)、李埣城跡（16)、沼木館跡（34)などの城館跡が点在している。

第Ⅲ章　発掘調査

1．確認調査について

確認調査は、宮城県教育委員会が主体となって平成17年10月31日～11月２日に実施した。新設予定の水路・道路区域を中心に49トレンチを設定（一部に長岡針遺跡含む）し、遺構や遺物の分布状況を確認した（第３図）。その結果、おおよそＡ～Ｃ地点にわたって古墳時代前期および時期不明の遺構が点在し、また、土師器などの遺物が分布することが分かった。特に、三輪足神社の西側（Ａ地点）や北側（Ｃ地点：長岡針遺跡）には古墳時代前期の遺物とともに溝跡や土坑などの遺構が分布しており、地形的にみても近辺に当該期の遺構群が広がる可能性が高いことが明らかになった。

遺構が検出された区域のうち、一部では切土が予定されており、遺構面まで工事深度が及ぶことが判明したが、Ａ地点（今回の調査区のＶ区西側周辺）では水田面に盛土を行い、遺構面まで影響が及ばないように工事計画を変更することになった。

2．本調査の方法と経過

調査対象となった区域は、主に新設道路・排水路設置区域および現道路の撤去区域である。「ほ場整備」工事の行程との関係から、発掘調査は３回（①Ⅰ・Ⅱ区、②Ⅲ・Ⅳ区、③Ⅴ区）に分けて実施することになった（第３図）。

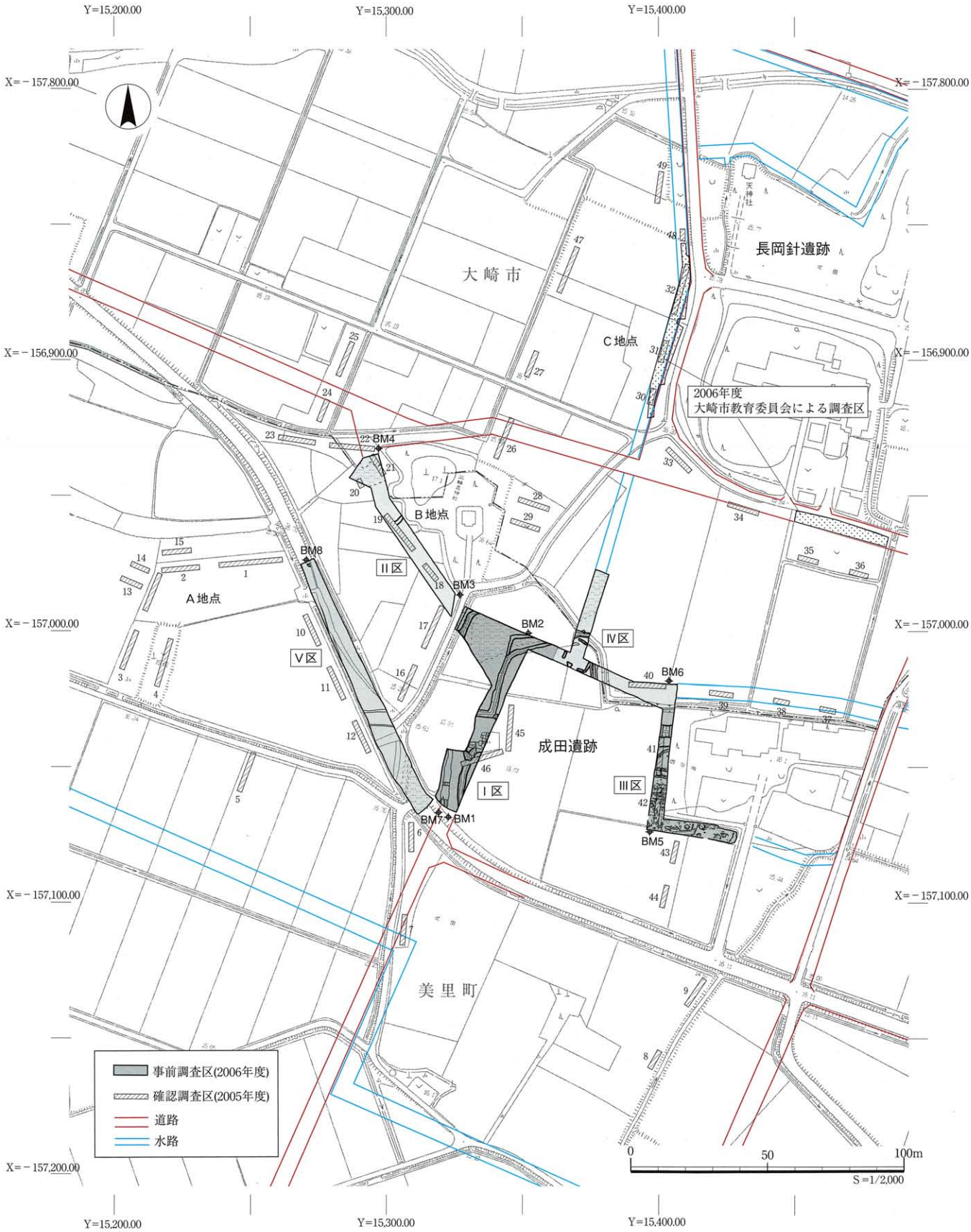
第３図に示したように、調査区は細長く不整形で、調査も３回に分けて実施することになったことから、調査に際しては各区の両端に任意の基準点（ＢＭ１～ＢＭ８）を設置した。遺構が比較的多く分布するⅠ区ではＢＭ１・ＢＭ２、Ⅲ・Ⅳ区ではＢＭ５・ＢＭ６を結ぶ線を南北の基準線に設定して、南北の基準線およびこれと直交する東西軸をもとに３ｍ方眼を組み、グリッドラインはⅠ区：BM1、Ⅲ・Ⅳ区：ＢＭ５をそれぞれ（0．0）に設定して東西・南北方向の距離（N10、S10など）で表した。また、遺構が希薄なⅡ・Ⅴ区ではそれぞれＢＭ３・ＢＭ４、ＢＭ７・ＢＭ８を基準とした。世界測地系にもとづく各基準点の座標値（平面直角座標第Ｘ系）は以下の通りである。

ＢＭ１：X=－157,068.097　Y=15,322.552　ＢＭ２：X=－157,000.411　Y=15,332.424
ＢＭ３：X=－156,986.501　Y=15,326.925　ＢＭ４：X=－156,932.585　Y=15,297.121
ＢＭ５：X=－157,073.956　Y=15,396.749　ＢＭ６：X=－157,018.341　Y=15,403.821
ＢＭ７：X=－157,066.462　Y=15,319.015　ＢＭ８：X=－156,974.978　Y=15,271.045

遺構の実測図は、平面図については縮尺＝1／100および１／20、断面図については1／20で作成した。写真撮影には６×７サイズのモノクロおよびカラーフィルム、デジタルカメラ（1000万画素）を使用した。

発掘調査は、道路（一部排水路・切土部分あり）予定区域の①：Ⅰ・Ⅱ区、排水路予定区域の②：Ⅲ・Ⅳ区、現道路撤去区域の③：Ⅴ区の順で実施した。各区の調査の経過は以下のとおりである。

Ⅰ・Ⅱ区：８月28日～９月12日。Ⅰ区は幅６ｍ（一部10～20m）×長さ103m、面積874㎡、Ⅱ区は幅


Y=15,200.00
Y=15,300.00
Y=15,400.00
X=－157,800.00
X=－156,900.00
X=－157,000.00
X=－157,100.00
X=－157,200.00
大崎市
長岡針遺跡
C地点
2006年度
大崎市教育委員会による調査区
B地点
A地点
II区
V区
IV区
III区
I区
成田遺跡
美里町
BM1
BM2
BM3
BM4
BM5
BM6
BM7
BM8
事前調査区(2006年度)
確認調査区(2005年度)
道路
水路
0
50
100m
S=1/2,000

第３図　調査区配置図

6ｍ（一部12m）×長さ66m、面積386㎡である。Ⅰ区では古墳時代前期の溝跡、湿地（遺物包含層）、中世の溝跡、近世の墓壙、時期不明の溝跡など、Ⅱ区では古墳時代前期の溝状遺構、湿地（遺物包含層）を検出した。遺構の検出面はⅦ～Ⅷ層面である。Ⅰ区の湿地西側にある南北方向の溝跡（SD09）からは古墳時代前期の塩釜式土器がややまとまって出土した。Ⅰ・Ⅱ区とも全体的にやや削平を受けている。湿地には“灰白色火山灰”が痕跡的に堆積していた。

写真１　調査状況（Ⅰ区：SD09付近）

写真２　調査状況（Ⅰ区：SD09）

Ⅲ・Ⅳ区：10月3日～10月26日。Ⅲ区は幅５ｍ×長さ74m、面積366㎡、Ⅳ区は幅５ｍ×長さ80m、面積434㎡である。Ⅲ区では近世・近代以降の屋敷に関わるとみられる掘立柱建物跡・井戸跡・溝跡など、Ⅳ区では古墳時代前期の方形周溝跡、土坑、Ⅰ区から延びる中世の溝跡、ほかに時期不明の溝跡などを検出した。遺構の検出面はⅦ～Ⅷ層面である。Ⅳ区の北側にはⅠ区から延びる湿地が広がることも判明した。

Ⅴ区：11月16日～11月21日。調査区は幅６～８ｍ×長さ102m、面積は734㎡である。Ⅶ層～Ⅷ層面で、古墳時代前期の土坑、Ⅰ区から延びているとみられる湿地、時期不明の溝跡を検出した。この調査区は現道路を撤去して水田化する区域であるが、工事深度が遺構面に影響を与えないことから、遺構の確認だけに留め、掘り下げ・精査は行っていない。

写真３　調査状況（Ⅳ区：SD12）

写真４　小牛田農林高校生徒来跡

3．基本層序

調査区は標高16～17mほどの自然堤防上に位置している。現況では水田や畑地として利用されており、戦後の水田整備の際に削平や盛土などがなされて段状に平坦化されている。層序は調査地点によって若干の相違があるが（第４図）、概ね以下のようである。

Ⅰ層：表土（主に耕作土）。層厚30～40cm。

Ⅱ層：灰白色火山灰（10世紀前葉頃に降灰したと推定される火山灰：十和田a）。Ⅰ・Ⅱ・Ⅳ・Ⅴ区の湿地に痕跡的に残存する。

Ⅲ層：黒褐色（10YR2/2）粘土質シルト。Ⅰ・Ⅱ・Ⅳ・Ⅴ区の湿地に残存する。層厚５～６cmほどと薄い。微高地に分布する黒褐色シルト（Ⅲ－Ⅳ層相当：10YR2/3）はⅢ区やⅤ区西側付近においてのみ残存する。

Ⅳa層：黒褐色（10YR3/2）シルト質粘土。Ⅲ層に比べ褐色味がある。Ⅰ・Ⅱ・Ⅳ・Ⅴ区の湿地に残存する。層厚は10～15cmほど。古墳時代前期の遺物を包含する。

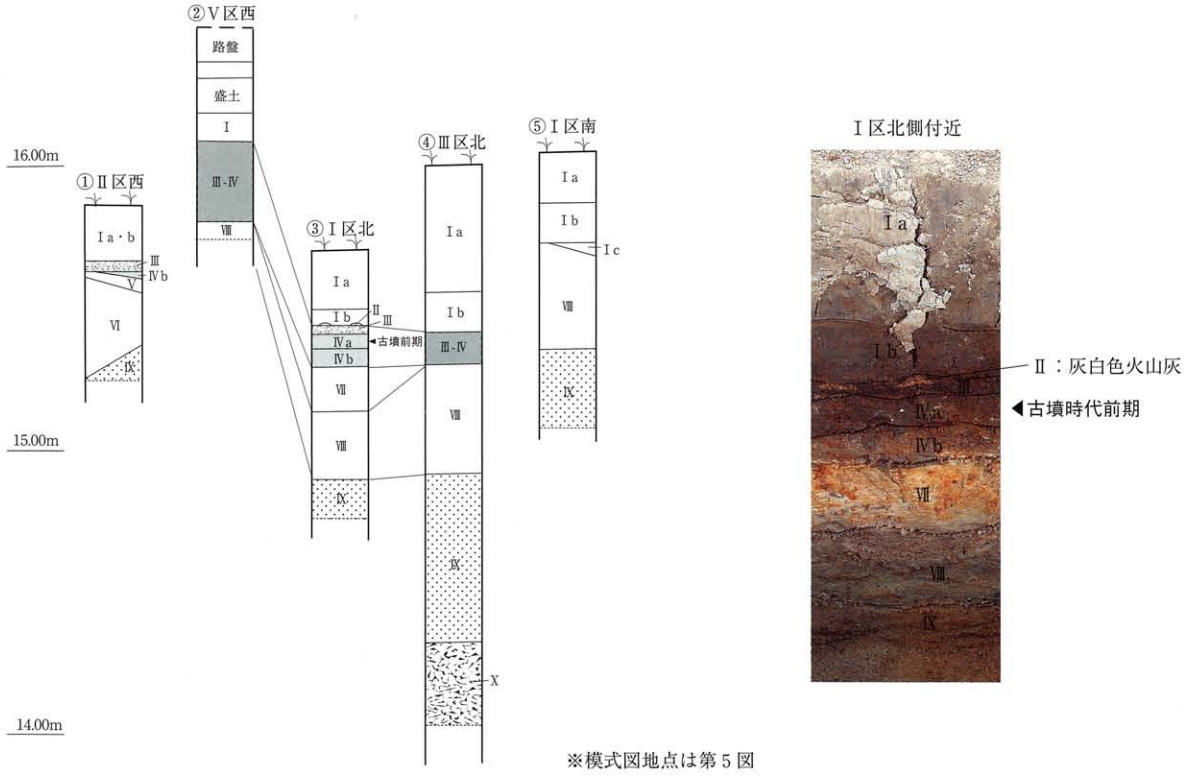
Ⅳb層：暗褐色（10YR3/3）粘土質シルト。やや灰色味を帯びる。Ⅰ・Ⅱ・Ⅳ・Ⅴ区の湿地に残存する。

Ⅴ層：にぶい黄橙色（10YR6/3）シルト。Ⅱ区西側にのみ分布する。

Ⅵ層：にぶい黄色（2.5Y6/3）シルト。Ⅱ区西側にのみ分布する。

Ⅶ層：明黄褐色（10YR7/6）粘土。主にⅠ区以西に分布する。

Ⅷ層：黄褐色（2.5Y5/3）シルト。ほぼ調査区全域に分布する。



第４図　層序模式図

Ⅸ層：オリーブ褐色（2.5Y4/4）細～粗砂。ほぼ調査区全域に分布するとみられる。

Ⅹ層：黒色（2.5Y5/1）粘土。Ⅲ・Ⅳ区の溝跡の底面で確認したが、調査区全域に広がっているとみられる。

なお、Ⅺ層以下については未確認である。

4．検出遺構と遺物

検出遺構には、古墳時代前期の方形周溝跡１条、溝跡３条、溝状遺構１条、土坑２基、湿地、中世の溝跡２条、近世・近代以降の掘立柱建物跡・溝跡・井戸跡・土坑などが多数ある。古墳時代前期の遺構はⅢ区以外の調査区からそれぞれ検出されているが、調査区の中央付近から西側にかけて散在するような状況である。また、近世・近代以降については東側のⅢ区に集中する（第５図）。

遺物はコンテナ13箱ほど出土している。大半は古墳時代前期の土器類であるが、他に中世陶器、近世陶磁器などがある。また、表土層などから縄文時代の遺物も若干数出土している。

以下、古墳時代から時期ごとに説明する。

(1) 古墳時代（前期）

１）検出状況（第５図、図版２～８）

当該期の遺構は、東側のⅢ区を除く各区域で検出されたが、その分布は全体的に希薄である。調査区の中央（Ⅰ・Ⅳ・Ⅴ区）と西端部（Ⅱ区）には南北方向に広がる湿地（遺物を包含する）があり、これらの周辺の微高地付近から方形周溝跡１条、溝跡３条、溝状遺構１条、土坑２基が検出されている。遺物は方形周溝跡や溝跡、湿地から土師器類が比較的まとまって出土した。

２）遺構と遺物

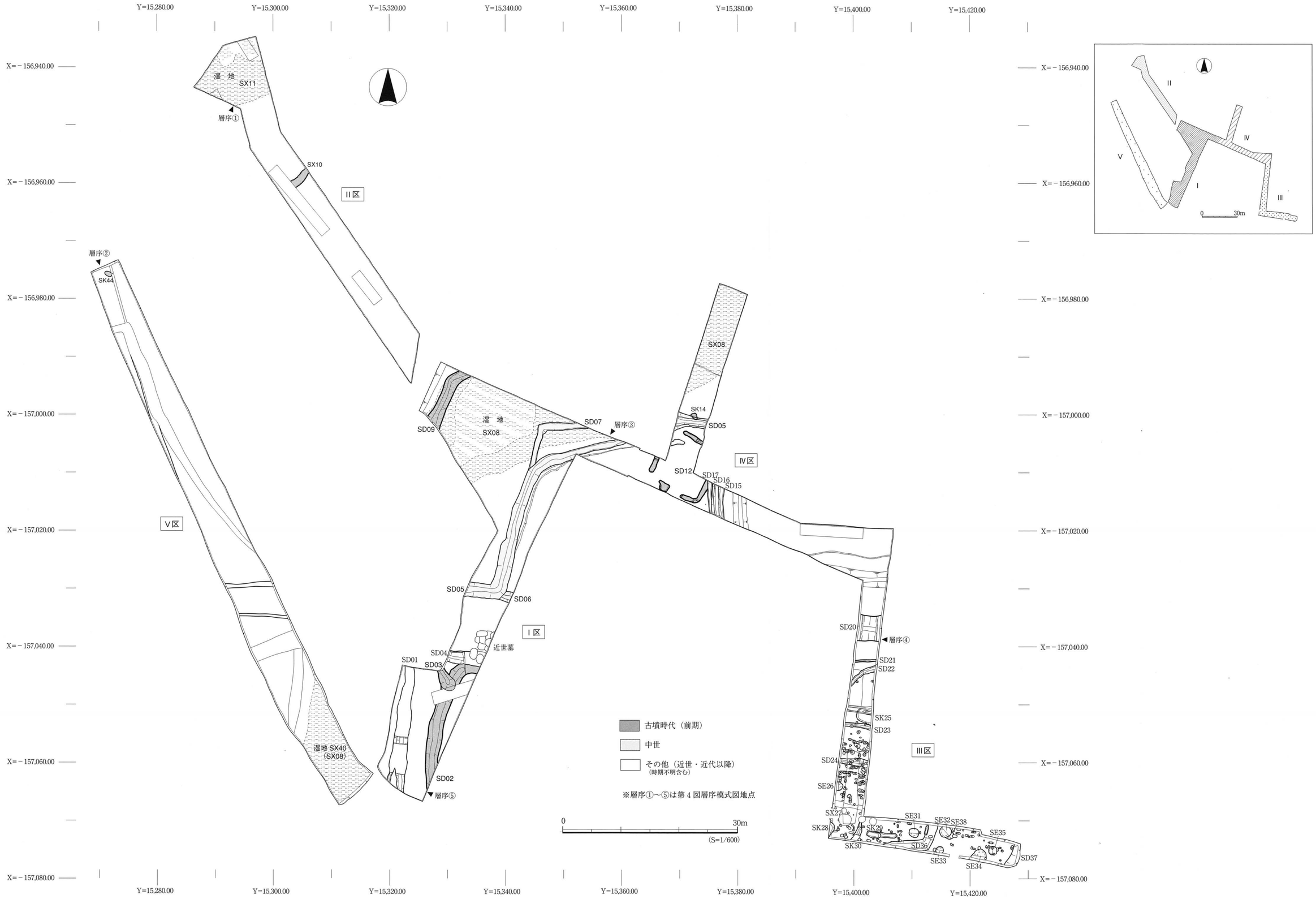
A．方形周溝跡

【SD12（SK13・19を含む）】（第６図～第９図、図版４・５・10・11）

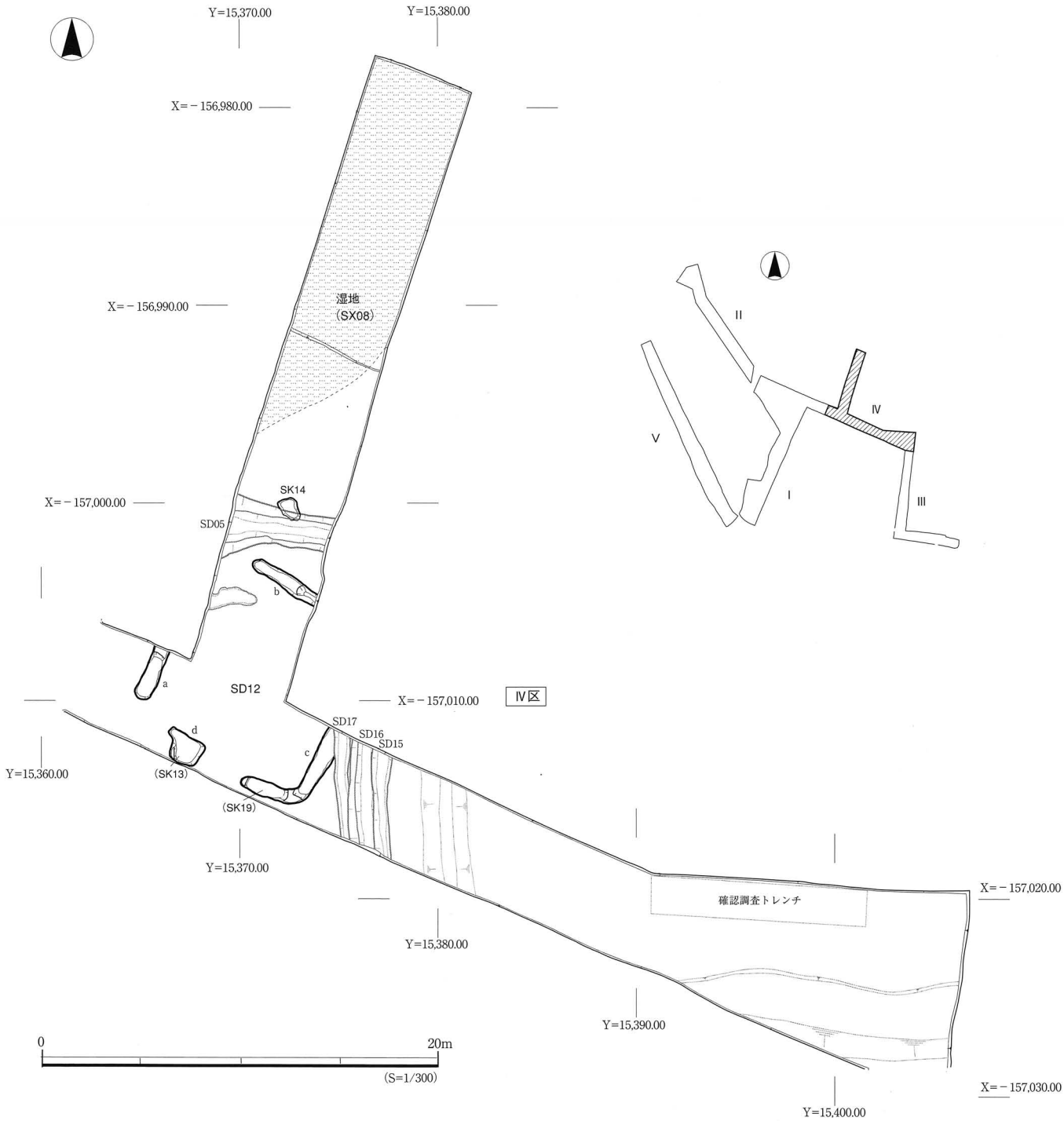
Ⅳ区中央付近に位置する。周溝跡は正方形状を呈するが、連続せずに部分的に途切れている。東辺はSD17溝跡に切られている。全体の規模は、周溝を含めた場合は東西10.6m・南北11.0m、周溝によって区画された内部は東西9.0m・南北8.9mほどである。区画内部では土坑や柱穴などの遺構、盛土の痕跡などは検出されてない。方向は、東辺でみると北で東へ約25°偏する。

周溝は、西辺（SD12a）・北辺（SD12b）・東辺（SD12c）側では上幅が70～95cm、底面幅が45～75cm、深さは５～25cmほどで、南辺（SD12ｄ：SK13）は不整な土坑状を呈し、大きさが東西2.0m・南北1.4m、深さは10～25cmである。SD12a～SD12cでは壁は概ね斜めに立ち上がり、断面形は浅いＵ字形を呈しているが、底面は平坦ではなく、それぞれ土坑状（隅丸方形）に窪む部分（SK19ほか）がある。土坑状に窪む部分は壁がほぼ垂直に立ち上がり、断面形は箱形を呈する。SD12ｄ（SK13）の断面形も浅い箱形を呈する。

堆積土は６層に細分でき、概ね上位（堆１・２）は灰黄褐色・黒褐色シルト、中位（堆３）は地山



第５図　遺構全体図（S＝1/600）



第６図　古墳時代の遺構（Ⅳ区）

ブロックを含むにぶい黄褐色シルト、下位（堆４・５）は黒褐色粘土質シルトを主体とする自然堆積土で、底面には壁面からの崩落土（堆６）がある。ただし、土坑状に窪む部分はやや異なり、下部には人為的な埋土の可能性があるにぶい黄色シルト（堆①）や黒色粘土質シルト（堆②）などが認められ、また、SD12d（SK13）では中位に薄い炭化物層が堆積している。

遺物は、SD12a～cでは底面およびやや浮いたレベル（堆４～５）から、SD12dでは人為的な可能

性がある埋土の上部の堆積層（堆４）から、多くの土師器類がそれぞれまとまりをもって出土している（第7図・図版４・５）。また、SD12dからは鹿角（図版５－３）が出土している。土師器類には器台（第８図－１・２）・鉢（第８図－３～８）・壺（第８図－９・10）・有孔鉢（第８図－11）・甕（第８図－12～14、第９図－１～５）があり、他にミニチュア土器などが含まれている。赤彩土器の小片も若干数含まれている。第８図－１は器台脚部の破片資料であるが、透孔が３孔つくものである。第８図－３はいわゆる小型丸底鉢である。第８図－10の大型壺の肩部破片には、横位の平行沈線の間を斜格子状の沈線で埋めた文様が描かれている。第８図－11の有孔鉢は、体部に内側からあいた径２cmほどの孔が認められる。甕類は最も点数が多いが、いずれも器高が30cm以下とみられる中型品であり、大型品は含まれていない。なお、第９図－３と４は同一個体である可能性が高い。

B．溝跡

【SD02・03】（第10図・第11図・第13図、図版６・11）

いずれもⅠ区南側に位置する。SD02溝跡は「 形に屈曲し、SD03溝跡はこのSD02に接続している。接点部分や堆積土の状況をみる限り、両者の新旧関係は認められず、これらは一連の溝跡とみられる。SD02はSD04溝跡と重複し、これよりも古い。

SD02は上幅2.1～2.5m・下幅0.8～1.1m、深さは20～30cmほどである。断面形は浅いU字形を呈する。堆積土は黒褐色シルトを主体とする自然堆積土である。

SD03はごく一部が検出されたのみであるが、上幅1.3～2.0m・下幅0.5～0.6m、深さ40～65cmほどで、SD02よりも深い。断面形はU字形を呈する。堆積土は黒褐～暗褐色シルト・粗砂などを主体とした自然堆積土である。

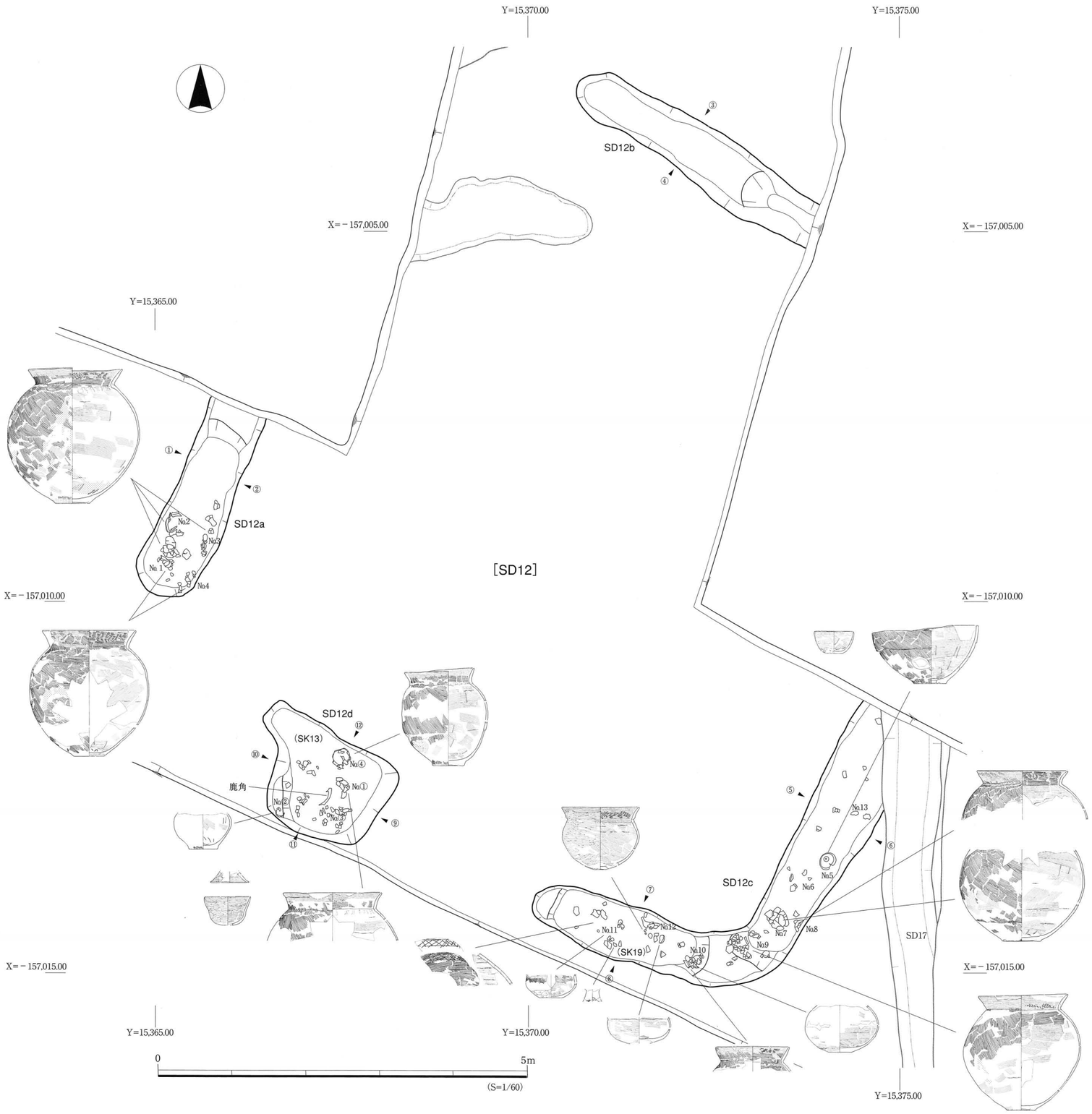
遺物は、SD02堆積土から土師器器台（第13図－１）・壺・甕などの破片、SD03堆積土から土師器小片が少量出土している。

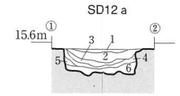
【SD09】（第12図・第13図、図版６・７・11・12）

Ⅰ区西端に位置し、SX08湿地の西側区域にある。南北方向に延びているが、北側はやや東へ曲がりながら調査区外へと延びている。Ⅳ層から掘り込まれている。

規模は、上幅1.8～2.5m・下幅0.6～1.0m、深さ15～40cmほどで、底面は北側よりも南側がやや深くなっている。断面形は幅広のU字形を呈する。堆積土は上層が灰白色火山灰を含む基本Ⅲ層：黒色粘土質シルト、中～下層が黒～黒褐色粘土質シルト・粘土を主体とする自然堆積土である。

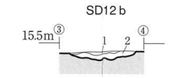
遺物は、基本Ⅲ層に対応する黒色粘土質シルト層よりもやや下位から土器類が比較的多く出土している。これらの土器類はいずれも個体ごとに集中するように分布し、ほぼ同じレベルから出土している（第12図、図版６・７）。土師器類には器台（第13図－２）・鉢・壺（第13図－３～５）・甕（第13図－７～10）・台付甕（第13図－６）などがある。４は頸部が欠落した有段口縁壺で、５は複合口縁壺である。甕類はいずれも中型品（器高30cm以下）である。





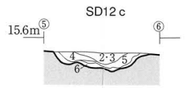
SD12a

層	土　色	土 性	備　考
1	灰黄褐（10YR4/2）	シルト	ほぼ均質。
2	黒褐（10YR3/2）	シルト	にぶい黄橙色シルトブロック、酸化鉄含む。
3	にぶい黄褐（10YR5/3）	シルト	地山に近似。崩落(流入)土。
4	黒褐（10YR3/1）	粘土質シルト	右半部ににぶい黄橙色シルトブロック含む。
5	黒褐（10YR2/2）	粘土質シルト	比較的均質。
6	にぶい黄(2.5Y6/3)	シルト質砂	地山に近似。4･5層のしみ込みあり。



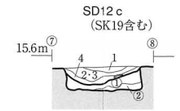
SD12b

層	土　色	土 性	備　考
1	黒褐（10YR3/1）	粘土質シルト	にぶい黄橙色シルトブロック、酸化鉄少量含む。
2	黒褐（10YR3/2）	シルト	にぶい黄橙色シルトブロックを多く含む。



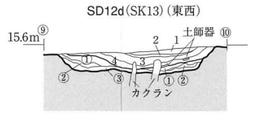
SD12c

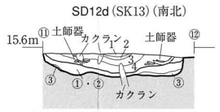
層	土　色	土 性	備　考
2･3	黒褐（10YR3/2）	シルト	にぶい黄橙色シルト(大)ブロックを部分的に含む。
4	灰黄褐（10YR4/2）	砂質シルト	にぶい黄橙色シルト(小)ブロック含む。
5	黒（10YR2/1）	粘土質シルト	にぶい黄橙色シルト(小)ブロックを若干含む。
6	にぶい黄(2.5Y6/3)	シルト質砂	地山に近似。2･3層のしみ込みあり。



SD12c（SK19）

層	土　色	土 性	備　考
1	灰黄褐（10YR4/2）	シルト	地山粒、酸化鉄を若干含む。
2･3	黒褐（10YR3/2）	シルト	にぶい黄橙色シルト（小）ブロックを部分的に含む。炭層を含む。
4	灰黄褐（10YR4/2）	砂質シルト	にぶい黄橙色シルト（小）ブロック含む。炭粒若干含む。
①	にぶい黄(2.5Y6/3)	粘土質シルト	地山に近似。粗砂を部分的に含む。
②	黒（10YR2/1）	粘土質シルト	にぶい黄橙色シルト（小）ブロック少量含む。粘性強い。



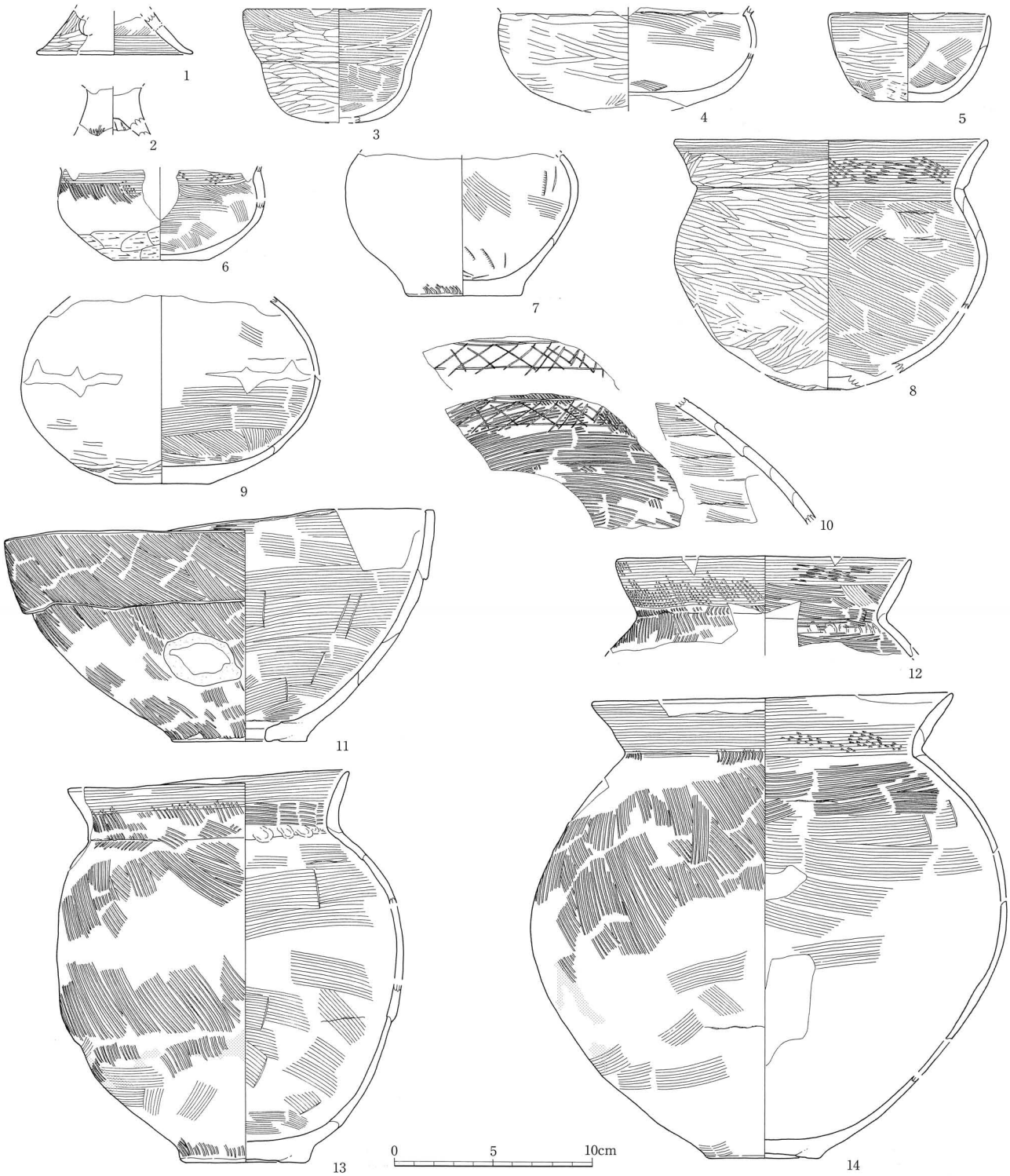


SD12d（SK13）

層	土　色	土 性	備　考
1	灰黄褐（10YR4/2）	シルト	比較的均質。
2	黒（10YR2/1）	シルト	基本的に炭層。
3	黒褐（10YR2/2）	シルト	にぶい黄色シルト(小)ブロックを全体的に含む。
4	黒褐（10YR2/2）	シルト	にぶい黄色シルト(小)ブロック含む。薄い炭層含む。
①	にぶい黄(2.5Y6/4)	砂質シルト	人為。地山に近似。上層のしみ込みあり。
②	黒（10YR2/1）	粘土質シルト	人為。粘性やや強い。
③	にぶい黄(2.5Y6/3)	シルト質砂	人為。地山に近似。上層のしみ込みあり。

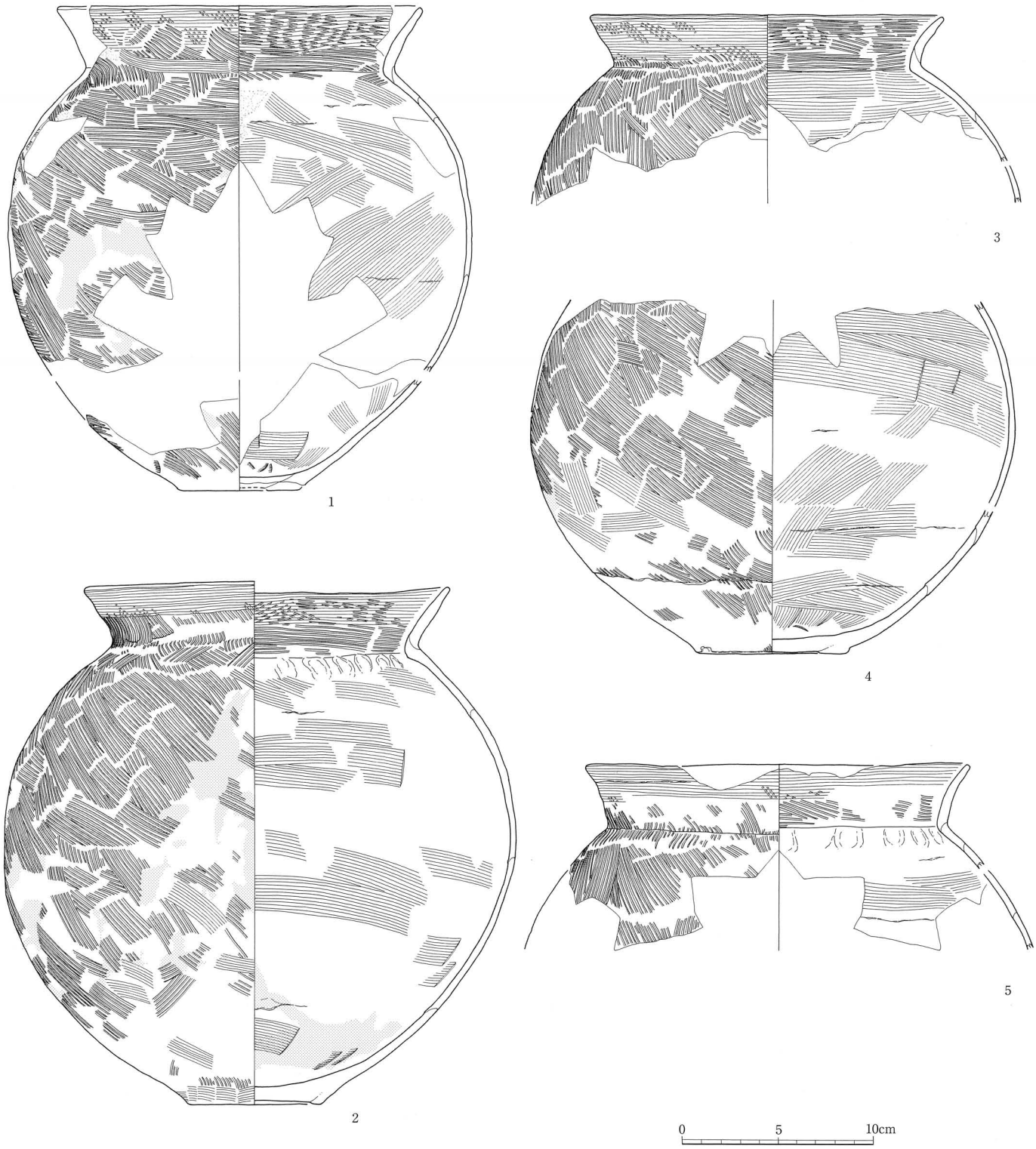
0　2m
(S=1/60)

第７図　SD12方形周溝跡



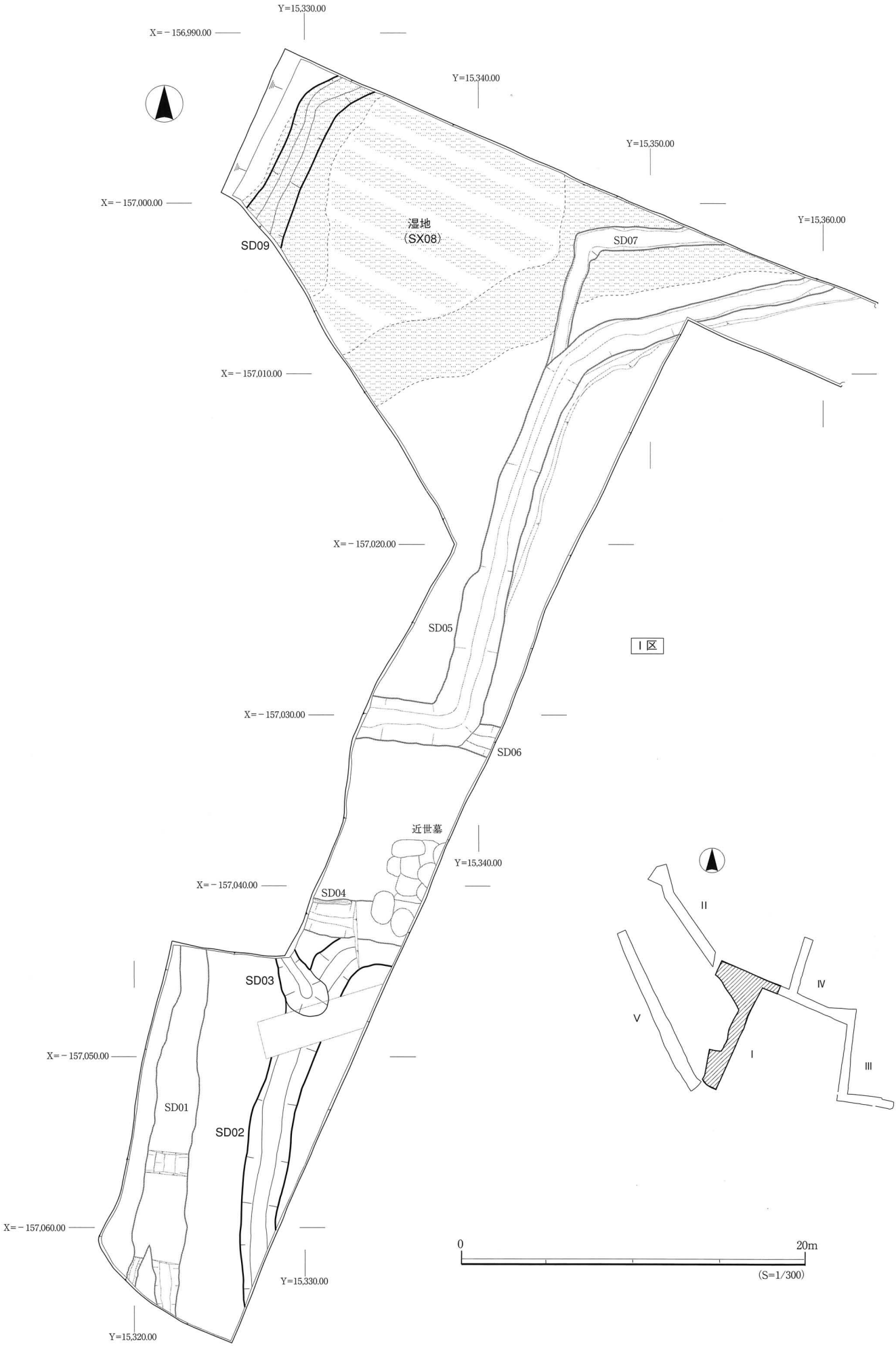
No.	器　種	遺構／層	残　存	法　量（cm）			特　徴	写真図版	登録
				口　径	底　径	器　高			
1	土師器　器台	SD12d（SK13）堆4	脚一部	－	(8.0)	－	外：（ハケメ）→ヘラミガキ　内：ヨコナデ・ナデ　透孔３	10-1	41
2	土師器　器台	SD12c－No.11	脚一部	－	－	－	外：一部ハケメ（磨滅）　内：（磨滅）	10-2	31
3	土師器　鉢	SD12d（SK13）堆4	1/2	9.4	－	(5.8)	外：[口]ヨコナデ・一部ヘラミガキ[体～底]ヘラミガキ 内：[口]ヨコナデ・一部ヘラミガキ[体～底]ナデ	10-3	40
4	土師器　鉢	SD12d（SK19）堆2	3/4	－	－	－	外：[体]ヘラミガキ　内：[体]ヘラナデ・ナデ　底部剥落	10-7	35
5	土師器　鉢	SD12c－No.6	1/2	(8.0)	3.2	4.4	外：[口]ハケメ→ヨコナデ・一部ヘラミガキ[体]ヘラミガキ/ヘラケズリ・ナデ　内：[口]ヨコナデ[体～底]ナデ	10-4	26
6	土師器　鉢	SD12c－No.11	1/3	－	4.6	－	外：[口]ハケメ→ヨコナデ[体～底]ヘラケズリ 内：[口]ヨコナデ・一部ハケメ[体～底]ナデ	10-5	32
7	土師器　鉢	SD12d（SK13）No.②	4/5	－	5.8	－	外：[体～底]ハケメ（磨滅）　内：[体～底]ヘラナデ・ナデ（磨滅）	10-6	37
8	土師器　鉢	SD12c－No.12	1/2	15.7	(2.0)	(12.6)	外：[口]ヨコナデ→ヘラミガキ[体～底]ヘラミガキ（一部ヘラケズリ） 内：[口]ハケメ→ヨコナデ[体～底]ナデ	10-9	34
9	土師器　壺	SD12c－No.10	3/5	－	4.8	－	外：[胴～底]ヘラミガキ　内：[体～底]ヘラナデ・ナデ	10-10	29
10	土師器　壺	SD12c－No.11	肩一部	－	－	－	外：ハケメ→平行沈線の間を斜格子状の沈線　内：ナデ	10-11	33
11	土師器　有孔鉢	SD12c－No.5	9/10	21.7	6.6	11.6	外：[口～底]ハケメ（複合口縁） 内：[口～底]ヘラナデ・ナデ　底部孔径：2.0cm　体部に孔あり	10-12	25
12	土師器　甕	SD12c－No.10	口一部	15.0	－	－	外：[口]ハケメ→ヨコナデ[胴上]ハケメ 内：[口]ハケメ→ヨコナデ[胴上]ハケメ　頸部にオサエ痕	10-8	30
13	土師器　甕	SD12d（SK13）No.④	1/2	14.1	6.6	19.7	外：[口]ハケメ→ヨコナデ[胴～底]ハケメ/一部ナデ（炭化物付着） 内：[口]ハケメ→ヨコナデ[胴～底]ヘラナデ・ナデ　頸部にオサエ痕	10-14	39
14	土師器　甕	SD12c－No.9	1/2	18.1	5.8	23.5	外：[口]ヨコナデ[胴～底]ハケメ/ナデ（炭化物付着） 内：[口]ハケメ→ヨコナデ[胴～底]ヘラナデ・ナデ	10-13	28

第８図　SD12方形周溝跡の出土遺物（1）

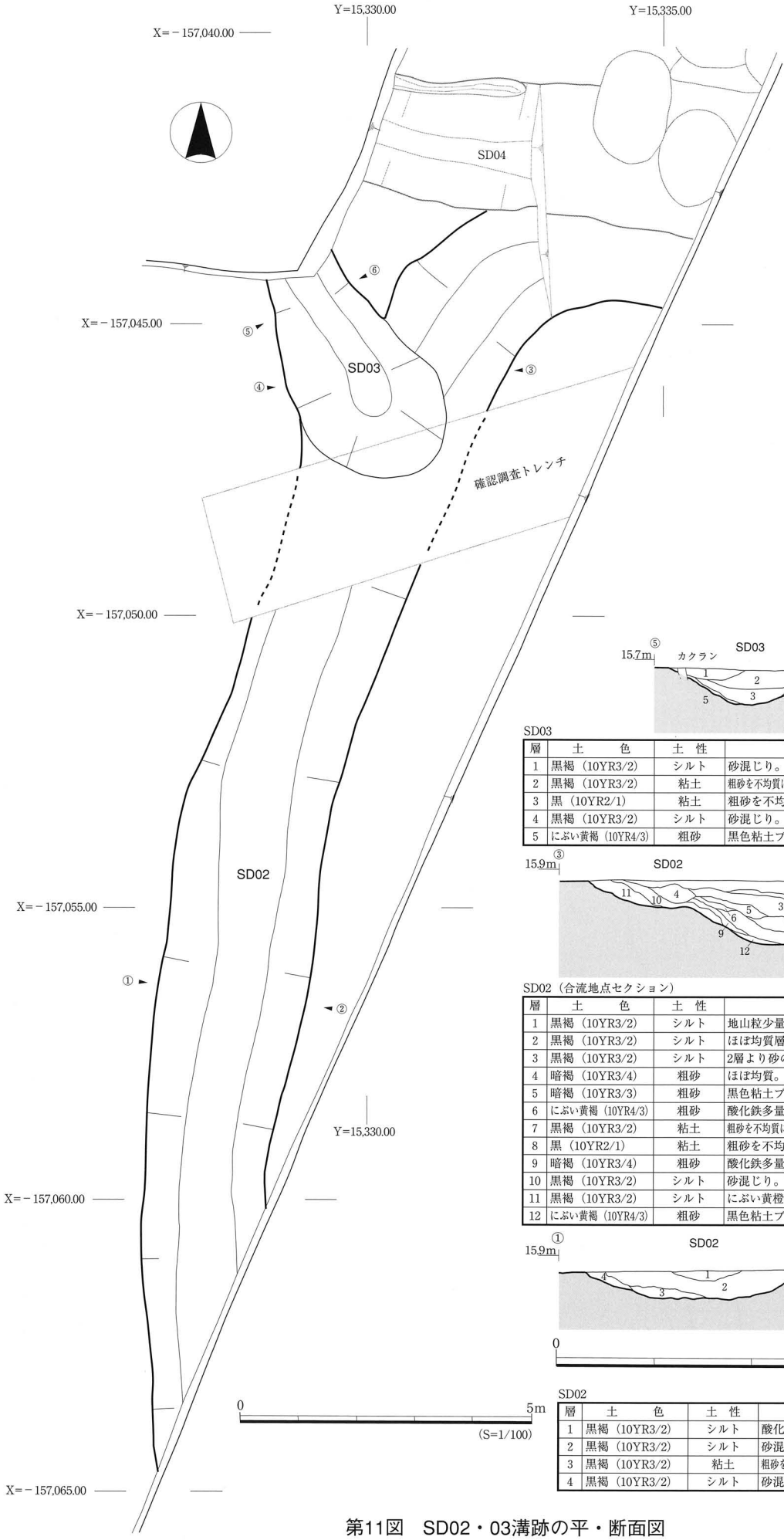


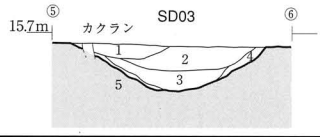
No.	器　種	遺構／層	残　存	法　量（cm）			特　徴	写真図版	登録
				口　径	底　径	器　高			
1	土師器　甕	SD12a－No.1, 4	1/5	(19.0)	(6.4)	(25.5)	外：[口]ハケメ→ヨコナデ→一部ハケメ・ナデ[胴～底]ハケメ（炭化物付着） 内：[口]ハケメ→ヨコナデ[胴～底]ヘラナデ・ナデ	11-1a. b	24
2	土師器　甕	SD12a－No.1, 2, 3	7/8	19.2	7.0	17.5	外：[口]ハケメ→ヨコナデ[胴～底]ハケメ/一部ナデ　内：[口]ハケメ→ヨコナデ[胴～底]ヘラナデ・ナデ　頸部にオサエ痕（炭化物付着）	11-2	23
3	土師器　甕	SD12c－No.8, 12	口～胴 1/3	18.4	－	－	外：[口]ハケメ→ヨコナデ[胴上]ハケメ 内：[口]ハケメ→ヨコナデ[胴上]ナデ	11-3	27a
4	土師器　甕	SD12c－No.7	胴～底 1/3	－	8.0	－	外：[胴～底]ハケメ・一部ナデ（炭化物付着） 内：[胴～底]ヘラナデ・ナデ	11-4	27b
5	土師器　甕	SD12d(SK13)No.①	口～胴 1/2	(20.0)	－	－	外：[口]ハケメ→ヨコナデ[胴上]ハケメ 内：[口]ハケメ→ヨコナデ[胴上]ナデ　頸部にオサエ痕	11-5	36

第９図　SD12方形周溝跡の出土遺物（2）



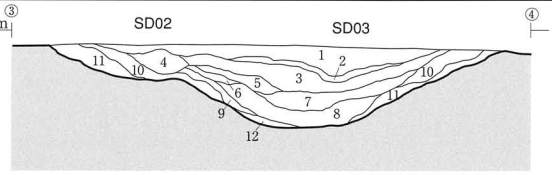
第10図　古墳時代の遺構（Ⅰ区）





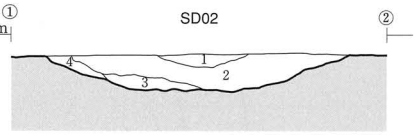
SD03

層	土　色	土　性	備　考
1	黒褐（10YR3/2）	シルト	砂混じり。
2	黒褐（10YR3/2）	粘土	粗砂を不均質に含む。酸化鉄、にぶい黄橙色粘土ブロック少量含む。
3	黒（10YR2/1）	粘土	粗砂を不均質に含む。
4	黒褐（10YR3/2）	シルト	砂混じり。下半部に酸化鉄を含む。
5	にぶい黄褐（10YR4/3）	粗砂	黒色粘土ブロックを部分的に含む。



SD02（合流地点セクション）

層	土　色	土　性	備　考
1	黒褐（10YR3/2）	シルト	地山粒少量含む。やや粘性あり。
2	黒褐（10YR3/2）	シルト	ほぼ均質層。砂混じり。
3	黒褐（10YR3/2）	シルト	2層より砂の量増す。
4	暗褐（10YR3/4）	粗砂	ほぼ均質。
5	暗褐（10YR3/3）	粗砂	黒色粘土ブロックを不均質に含む。
6	にぶい黄褐（10YR4/3）	粗砂	酸化鉄多量含む。
7	黒褐（10YR3/2）	粘土	粗砂を不均質に含む。酸化鉄、にぶい黄橙色粘土ブロック少量含む。
8	黒（10YR2/1）	粘土	粗砂を不均質に含む。特に左半部多量。
9	暗褐（10YR3/4）	粗砂	酸化鉄多量含む。粗砂を部分的に含む。
10	黒褐（10YR3/2）	シルト	砂混じり。下半部に酸化鉄を含む。
11	黒褐（10YR3/2）	シルト	にぶい黄橙色砂質シルトブロックを部分的に含む。
12	にぶい黄褐（10YR4/3）	粗砂	黒色粘土ブロックを部分的に含む。

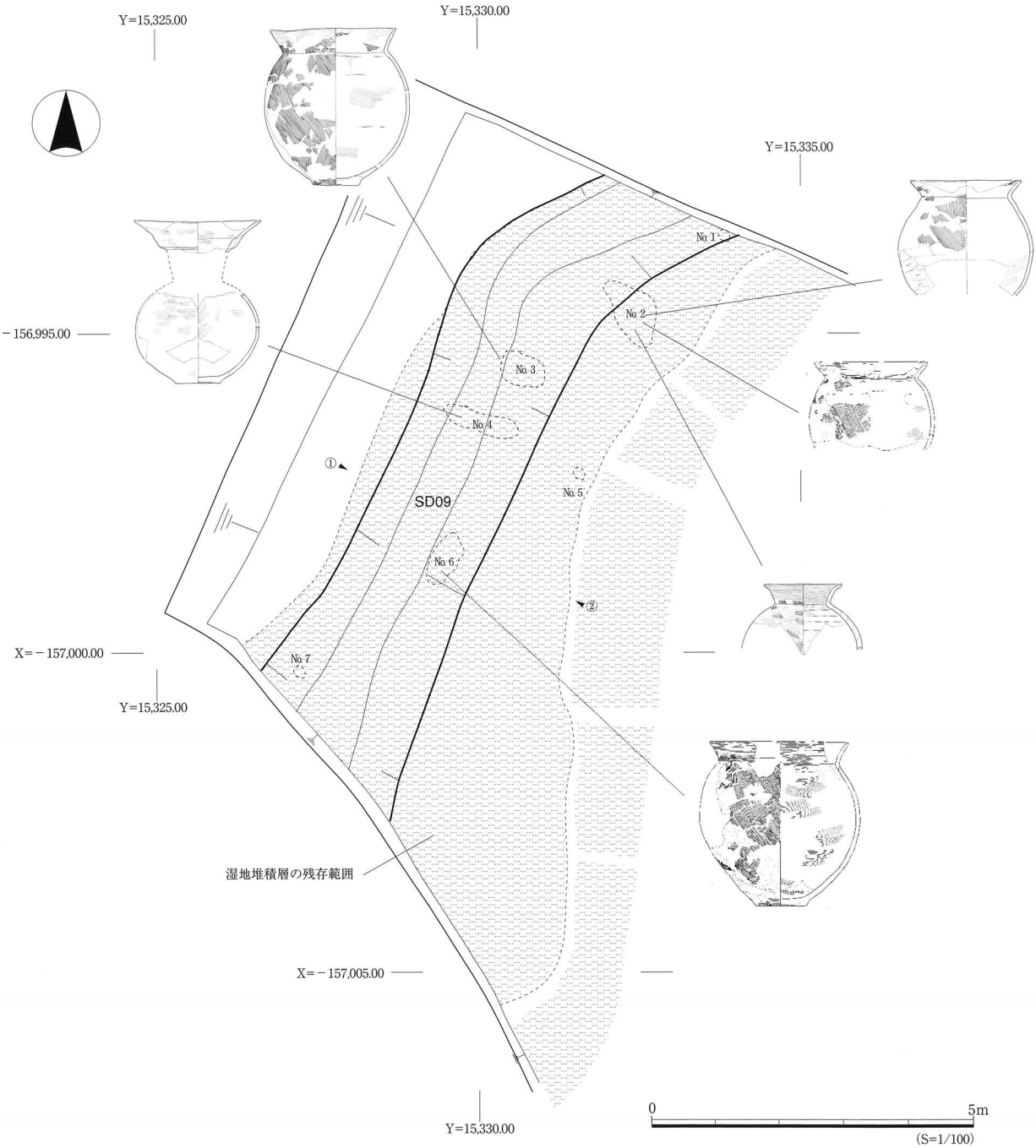


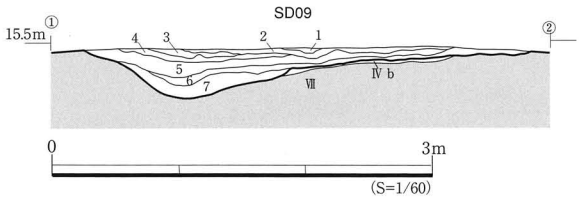
0　3m
(S=1/60)

SD02

層	土　色	土　性	備　考
1	黒褐（10YR3/2）	シルト	酸化鉄、マンガンを下部に少量含む。しまり強い。
2	黒褐（10YR3/2）	シルト	砂混じり。
3	黒褐（10YR3/2）	粘土	粗砂を不均質に含む。にぶい黄橙粘土ブロック、酸化鉄少量含む。
4	黒褐（10YR3/2）	シルト	砂混じり。下半部に酸化鉄含む。

第11図　SD02・03溝跡の平・断面図

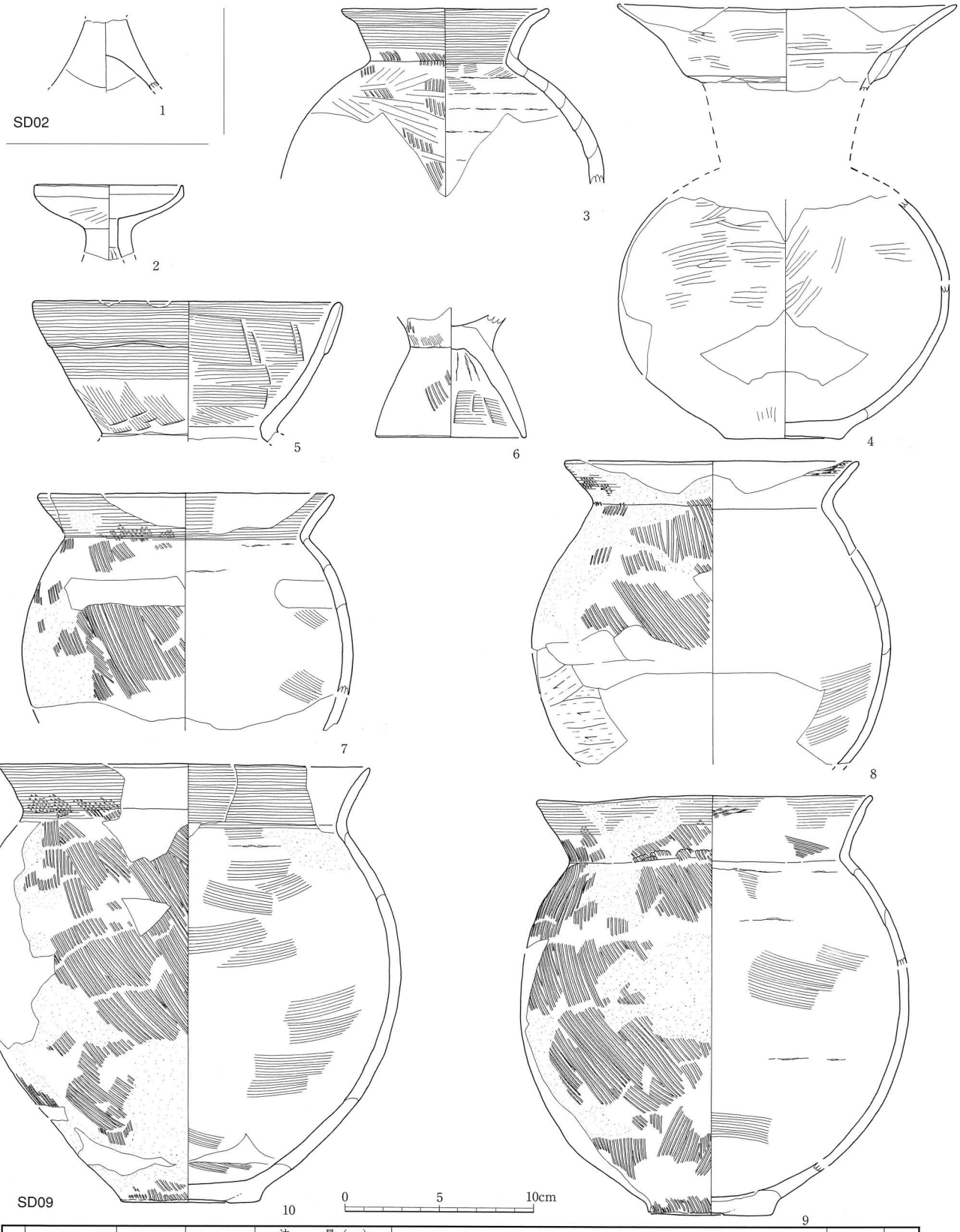




SD09

層	土　色	土 性	備　考
1	黒褐（10YR2/2）	粘土質シルト	基本Ⅲ層。灰白色火山灰ブロック含む。
2	黒（10YR2/1）	粘土質シルト	酸化鉄若干含む。
3	黒褐（10YR2/2）	粘土質シルト	遺物包含層。
4	黒（10YR2/1）	粘土質シルト	遺物包含層。
5	黒褐（10YR3/1）	粘土質シルト	砂を不均質に含む。
6	黒（10YR2/1）	粘土	粘性強い。
7	黒褐（10YR3/1）	粘土	底面付近、Ⅶ層と不規則に混じり合う。

第12図　SD09溝跡の平・断面図



No.	器　　種	遺構／層	残　存	法　量（cm）			特　　徴	写真図版	登録
				口　径	底　径	器　高			
1	土師器　器台	SD02　堆	脚部のみ	－	－	－	外：（磨滅）　内：（磨滅）	11-6	1
2	土師器　器台	SD09　堆	受部3/5	(7.8)	－	－	外：ミガキ（磨滅）　内：（磨滅）	11-7	15
3	土師器　壺	SD09－No.2	口～胴1/4	(10.8)	－	－	外：[口]ハケメ→ヨコナデ[胴]ハケメ→ヘラミガキ 内：[口]ヨコナデ[胴]ナデ	11-8	10
4	土師器　壺	SD09－No.4	口1/3 胴1/2	(17.8)	6.2	－	外：[口]ヘラミガキ[胴～底]ヘラミガキ（磨滅）　有段口縁 内：[口]ヘラミガキ[胴～底]ヘラミガキ（磨滅）	12-1a.b	13
5	土師器　壺	SD09　堆	口縁部のみ	16.2	－	－	外：[口] ヨコナデ/ヘラナデ　内：[口]ヨコナデ/ヘラナデ　複合口縁	11-9	17
6	土師器　台付甕	SD09　堆	台部1/2	－	8.0	－	外：ハケメ・一部ナデ（磨滅）　内：ヘラナデ（磨滅）	12-6	16
7	土師器　甕	SD09－No.2	口～胴1/3	(15.5)	－	－	外：[口] ハケメ→ヨコナデ[胴]ハケメ（剥落あり） 内：[口] ヨコナデ[胴]ナデ（磨滅）	12-2	8
8	土師器　甕	SD09－No.2	口～胴1/4	15.5	－	－	外：[口] ハケメ→ヨコナデ[胴]ハケメ/ヘラケズリ（剥落あり） 内：[口] ハケメ→ヨコナデ[胴]ナデ（磨滅）	12-3	9
9	土師器　甕	SD09－No.3	1/3	17.6	6.5	22.1	外：[口] ハケメ→ヨコナデ[胴～底]ハケメ（剥落あり） 内：[口] ハケメ→ヨコナデ[胴]ナデ（磨滅）	12-5	11
10	土師器　甕	SD09－No.6	2/3	19.4	7.2	23.1	外：[口] ハケメ→ヨコナデ[胴～底]ハケメ（剥落あり） 内：[口] ハケメ→ヨコナデ[胴]ナデ（磨滅）	12-4	14

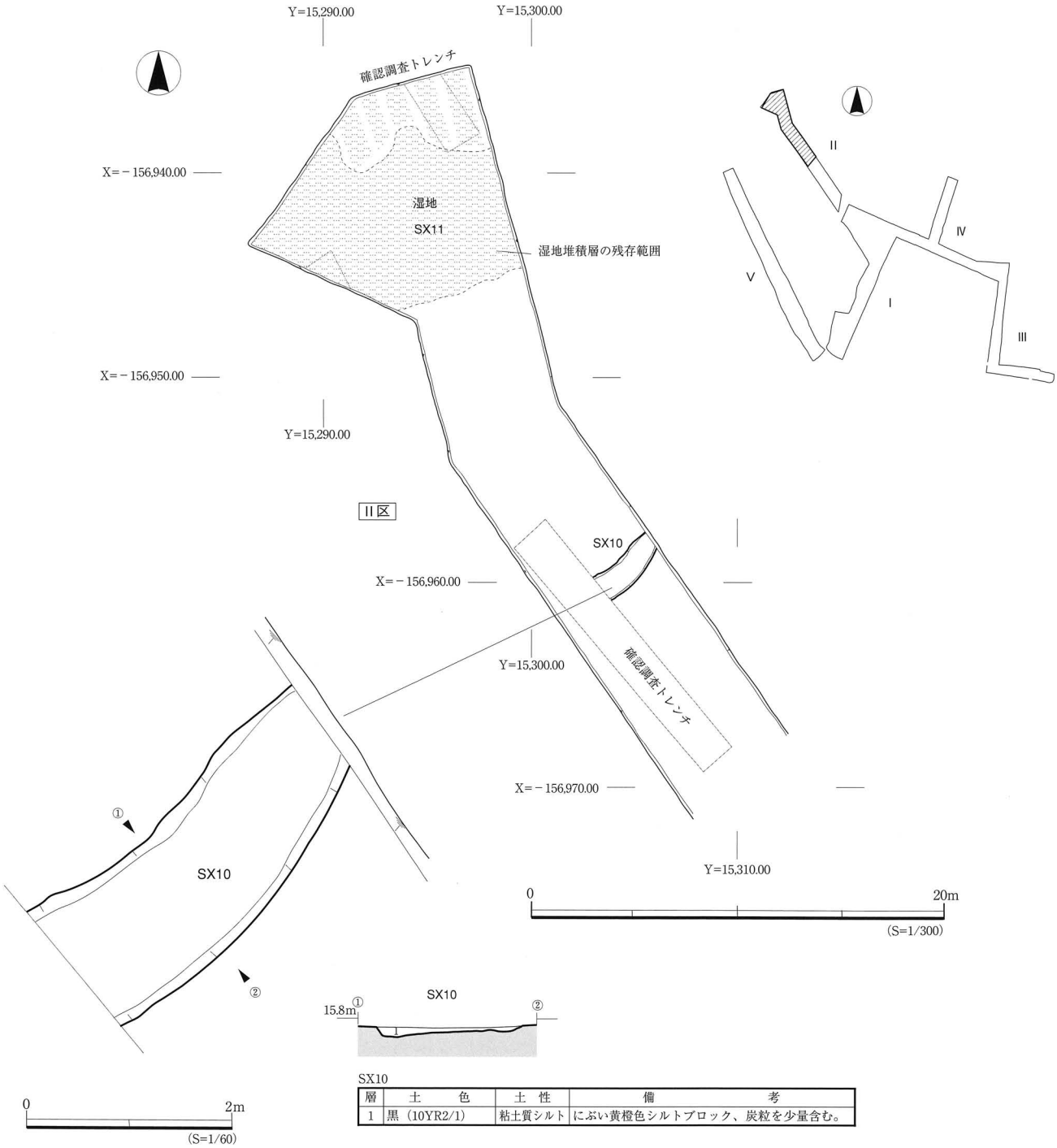
第13図　SD02・09溝跡の出土遺物

C．溝状遺構

【SX10】（第14図）

Ⅱ区中央からやや西寄りに位置する。南北方向に延びるが、全体的に浅く、両縁がやや不整な溝状を呈する。北側は調査区外へ延び、南側は確認調査トレンチより先が不明である。

規模は、上幅0.9～1.6m・下幅0.6～1.5m、深さ2～10cmほどである。西壁はやや急に立ち上がる部分もあるが、東壁はゆるやかで、底面にはやや凹凸がある。堆積土は黒色粘土質シルトを主体とする



SX10

層	土　色	土 性	備　考
1	黒（10YR2/1）	粘土質シルト	にぶい黄橙色シルトブロック、炭粒を少量含む。

第14図　古墳時代の遺構（Ⅱ区）とSX10溝状遺構

自然堆積土で、若干、炭化物粒が混じっている。

遺物は、堆積土から土師器壺・甕などの破片が少量出土している。

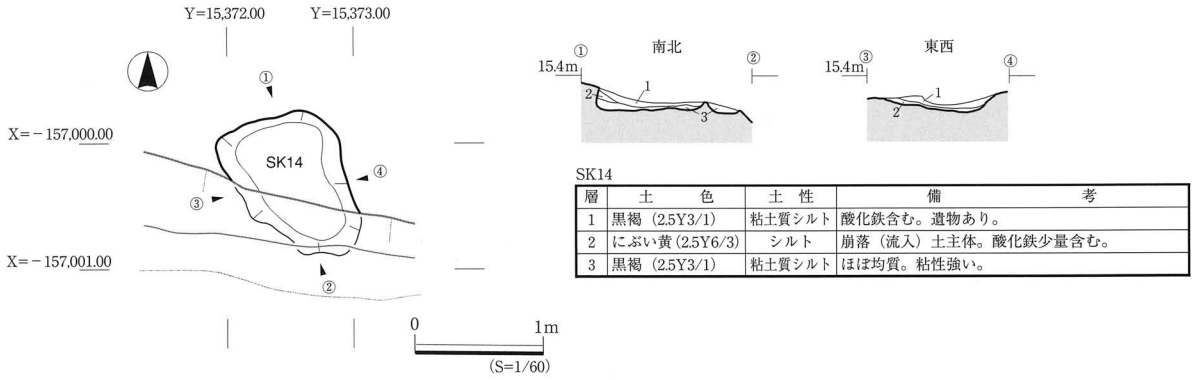
D. 土坑

【SK14】（第６図・第15図、図版８）

Ⅳ区の北側に位置する（第６図）。後述する中世期のSD05溝跡に壊されており、残存はやや不良である。

平面形は不整な隅丸方形状を呈していたとみられ、残存する長軸は125cm・短軸は90cmほどで、深さは15～21cmである。断面形は概ね皿状を呈するが、底面はやや凹凸があり、壁の一部（北壁）は垂直に立ち上がる部分がある。堆積土は３層に細分できるが、黒褐色粘土質シルトを主体とする自然堆積土である。

遺物は、堆積土から土師器甕破片が少量出土している。



SK14

層	土　色	土　性	備　考
1	黒褐（2.5Y3/1）	粘土質シルト	酸化鉄含む。遺物あり。
2	にぶい黄(2.5Y6/3)	シルト	崩落（流入）土主体。酸化鉄少量含む。
3	黒褐（2.5Y3/1）	粘土質シルト	ほぼ均質。粘性強い。

第15図　SK14土坑（Ⅳ区）

【SK44】（第５図、図版８）

Ⅴ区西端側に位置する（第５図）。この調査区は確認調査区のため、遺構は掘り下げていない。新しい溝によって一部が壊されている。

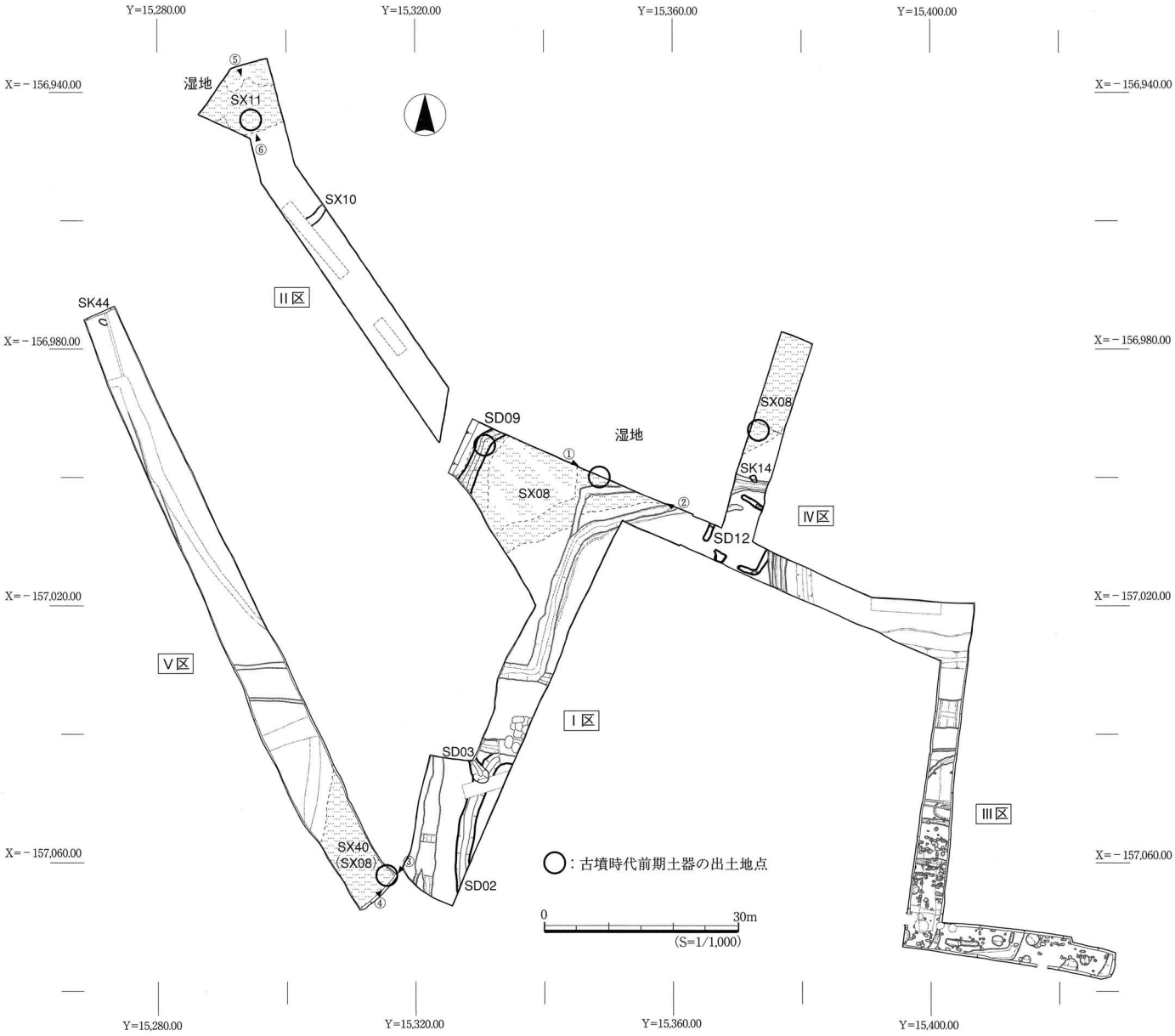
平面形は楕円形を呈する。長軸112cm・短軸58cmほどである。確認面で堆積土を観察すると、中央部は比較的均質な黒色シルトであるが、周縁部は地山ブロックを不均質に含んでいる。上面からは土師器小片が出土している。

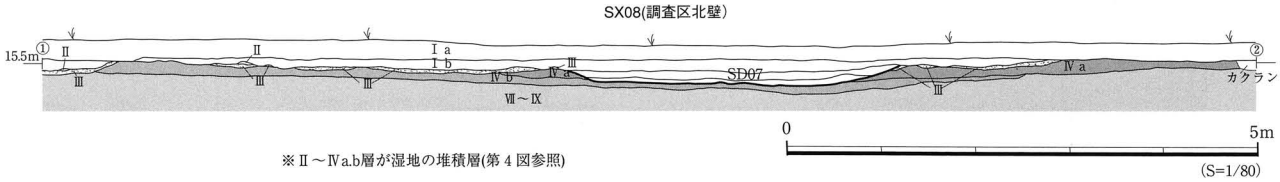
E. 湿地（遺物包含層）

旧河川の名残りともみられる湿地であるが、今回の調査では明らかな河川跡と言える遺構は捉えられていない。その範囲には“灰白色火山灰”が痕跡的に分布し、その下位には黒色土層（基本Ⅲ・Ⅳ層）が薄く堆積している。

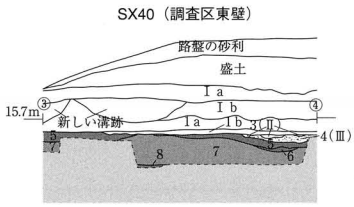
【SX08 (SX40を含む)】（第16図・第17図、図版８・12・13）

Ⅰ・Ⅳ・Ⅴ区で検出されたが、連続する一連の湿地とみられる（第16図）。その場合、少なくとも



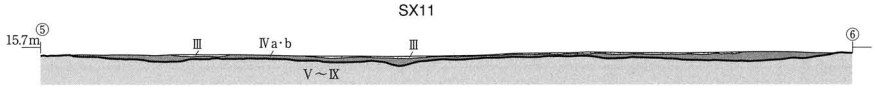


※Ⅱ～Ⅳa.b層が湿地の堆積層(第４図参照)

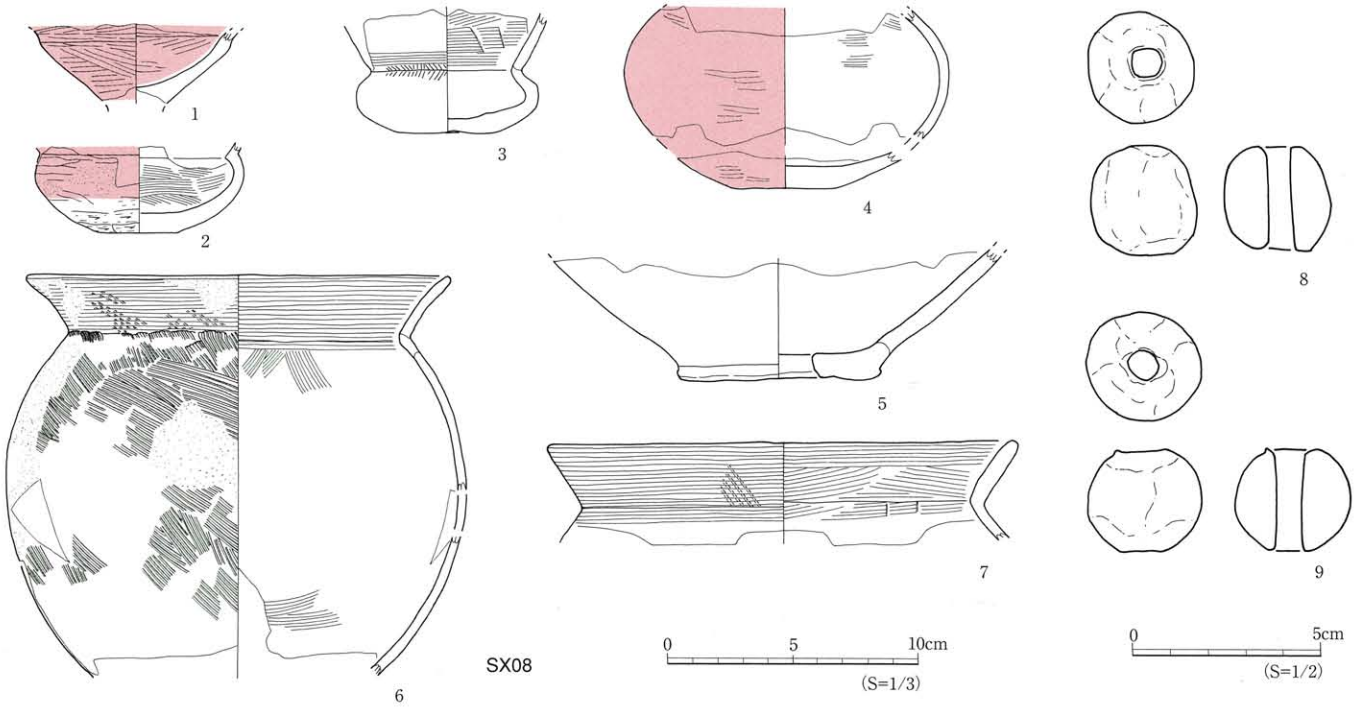


SX40

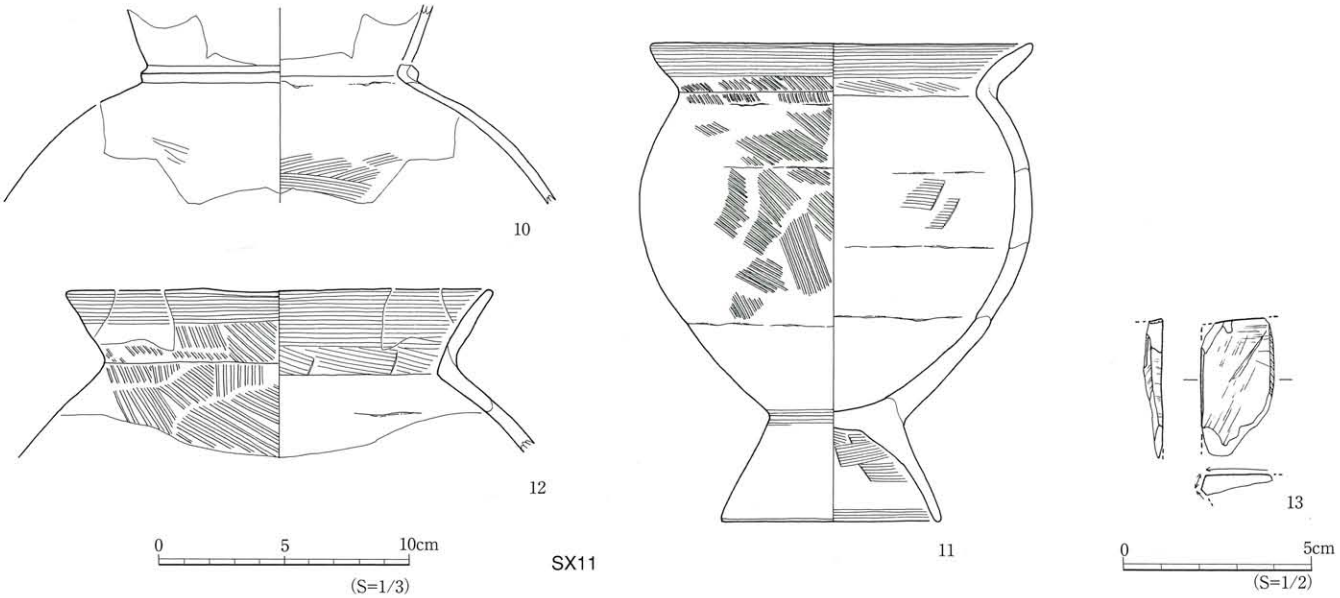
層	土　色	土 性	備　考
1a	オリーブ黒（5Y3/1）	シルト質粘土	ほぼ均質。
1b	オリーブ黒（5Y3/2）	シルト質粘土	酸化鉄を含む。
2	黒褐（10YR3/2）	粘土質シルト	酸化鉄を少量含む。調査区北壁で確認。
3	灰黄褐（10YR6/2）	粘土質シルト	基本Ⅱ層対応。灰白色火山灰ブロックを断続的に含む。
4	黒（10YR2/1）	シルト質粘土	基本Ⅲ層対応。酸化鉄、細砂を部分的に含む。
5	黒褐（10YR2/3）	シルト質粘土	酸化鉄を多量含む。古墳前期土器出土。
6	黒（10YR2/1）	粘土質シルト	ほぼ均質。
7	暗赤褐（5YR3/6）	シルト	全体にわたり酸化鉄の沈着著しい。
8	黒（10YR2/1）	粘土	粘性強い。黒味強い。



第16図　湿地と古墳時代前期土器の出土地点



No.	器種	遺構／層	残存	法量(cm) 口径	底径	器高	特徴	写真図版	登録
1	土師器 器台	Ⅰ区SX08 Ⅳa	受部3/4	−	−	−	外：ヘラミガキ→赤彩 内：ヘラミガキ→赤彩	12-7	5
2	土師器 鉢	Ⅳ区SX08 Ⅳa	体～底1/3	−	3.2	−	外：[体～底]ヘラミガキ→赤彩／ヘラケズリ（剥落あり） 内：[体～底]ナデ	12-8	42
3	土師器 鉢	Ⅰ区SX08 Ⅳa	3/5	−	−	−	外：[口]ハケメ→ヨコナデ [体～底] ハケメ（磨滅） 内：[口]ヘラナデ[体～底](磨滅)	12-9	2
4	土師器 壺	Ⅳ区SX08 Ⅳa	胴・底部一部	−	4.0	−	外：[体～底]ヘラミガキ→赤彩（磨滅） 内：[体～底]ナデ（磨滅）	12-10	4
5	土師器 有孔鉢	Ⅳ区SX08 Ⅳa	底部のみ	−	8.0	−	外：[体～底](磨滅) 内：[体～底](磨滅) 孔径：2.5～3.0cm	13-1	3
6	土師器 甕	Ⅴ区SX40（SX08）	口～胴1/4	15.5	−	−	外：[口]ハケメ→ヨコナデ[胴]ハケメ（剥落あり） 内：[口]ハケメ→ヨコナデ[胴]ナデ（磨滅）	13-3	43
7	土師器 甕	Ⅰ区SX08 Ⅳa	口縁部1/2	(18.7)	−	−	外：[口]ハケメ→ヨコナデ 内：[口]ヨコナデ/ヘラナデ	13-2	7
8	土玉	Ⅰ区SX08 Ⅳa	一部欠	器高：2.9cm 器幅：2.8cm 孔径：0.8cm 全体磨滅				13-4	土1
9	土玉	Ⅰ区SX08 Ⅳa	一部欠	器高：2.7cm 器幅：3.0cm 孔径：0.8cm 全体磨滅				13-5	土2



No.	器種	遺構／層	残存	法量(cm) 口径	底径	器高	特徴	写真図版	登録
10	土師器 壺	Ⅱ区SX11 Ⅳa	口～胴部一部	−	−	−	外：[口] (磨滅)[胴]ヘラミガキ（磨滅） 内：[口] (磨滅)[胴]ナデ（磨滅） 頸部に隆帯	13-6	22
11	土師器 台付甕	Ⅱ区SX11 Ⅳa	4/5	15.2	8.7	15.2	外：[口] ハケメ→ヨコナデ[胴]ハケメ[脚](磨滅) 内：[口] ヨコナデ/ナデ[胴]ヘラナデ（磨滅)[脚]ヘラナデ/ヨコナデ	13-7	20
12	土師器 甕	Ⅱ区SX11 Ⅳa	口縁部1/2	17.0	−	−	外：[口] ハケメ→ヨコナデ[胴]ハケメ 内：[口] ヘラナデ→ヨコナデ[胴](磨滅)	13-8	21
13	砥石	Ⅱ区SX11 Ⅳa	一部	シルト岩製 残存長：(3.4)cm 残存幅：(1.9)cm 残存厚：(0.5)cm				13-9	石5

第17図 SX08・SX11湿地の出土遺物

南北方向で長さ100m以上あり、幅はⅠ区では15～20mほどである。灰白色火山灰（Ⅱ層）やその下位の黒褐色シルト質粘土（Ⅲ層）や黒褐色～暗褐色シルト質粘土（Ⅳ層）はいずれもこの凹地に残存しているが、Ⅲ層は厚さが５cm、Ⅳ層は15cmほどと薄い。以前の開田の際に全体的に削平を受けているようである。

遺物はⅠ区の北東部、Ⅳ区の南西部、Ⅴ区（掘り下げは土層観察のトレンチのみ）の東端部付近のⅣa層から比較的多く出土しているが（第16図）、小破片資料が目立つ。土師器類には器台（第17図－１）・鉢（第17図－２・３）・壺（第17図－４）・有孔鉢（第17図－５）・甕（第17図－６・７）などがある。他に土玉（第17図－８・９）が出土している。１の器台、２の鉢、４の壺には赤彩が施されている。

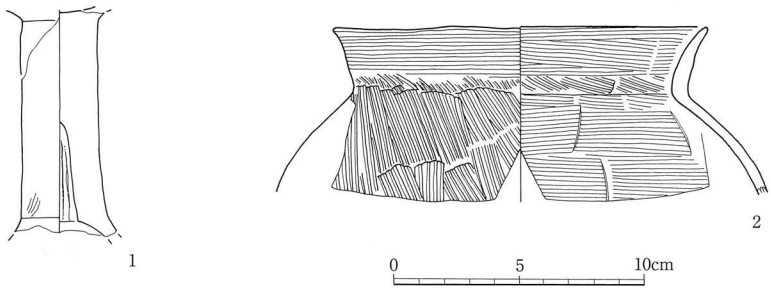
【SX11】（第14図・第16図・第17図、図版８・13）

Ⅱ区西端に位置する。南北に延びているとみられるが、全体的に削平されており、堆積層は薄い。前述のSX08と同様に、灰白色火山灰や黒褐色粘土質シルト（Ⅲ層）・黒褐色～暗褐色粘土（Ⅳ層）の分布が厚さ10cmほど認められる。

遺物は、南東部付近から土師器壺（第17図－10）・台付甕（第17図－11）・甕（第17図－12）、砥石（第17図－13）などが出土している。10の壺は頸部に隆帯が巡っている。

F．その他の出土遺物（第18図、図版13）

表土層などから、土師器高坏（第18図－１）・壺・甕（第18図－２）などが若干数出土している。１の高坏は棒状の脚部のみの資料で、脚上部は中実、下部は中空である。



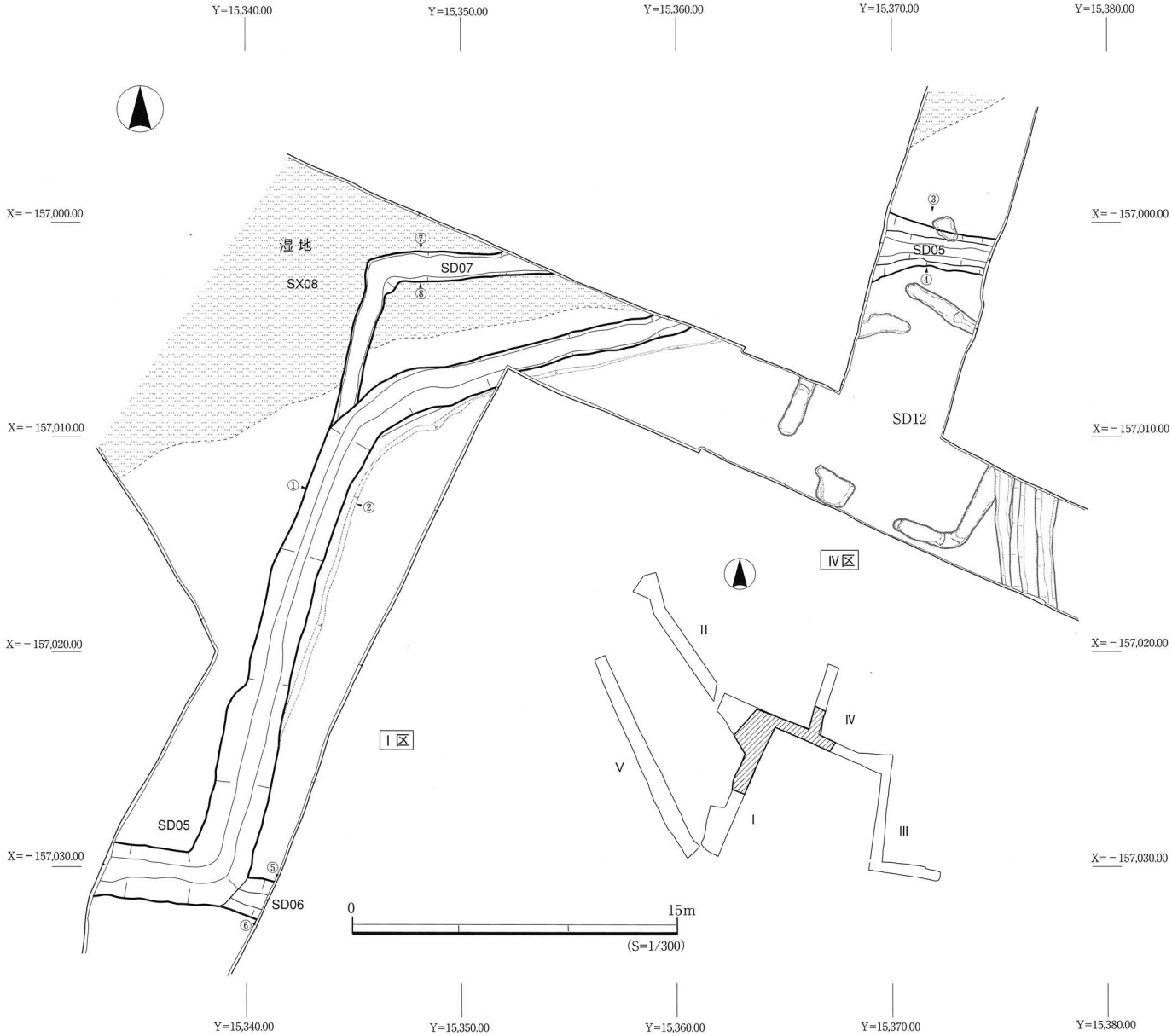
No.	器種	遺構／層	残存	法量（cm） 口径	底径	器高	特徴	写真図版	登録
1	土師器　高坏	Ⅰ区　遺確時	脚部のみ	－	－	－	外：ヘラミガキ（磨滅）　内：（磨滅）	13-10	18
2	土師器　甕	Ⅴ区　Ⅰa	口縁部1/2	(14.8)	－	－	外：[口]ハケメ→ヨコナデ[胴]ハケメ　内：[口]ハケメ→ヨコナデ[胴]ヘラナデ	13-11	44

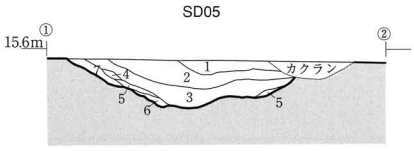
第18図　その他の出土遺物

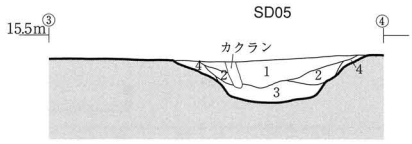
(2) 中世

1）検出状況（第19図、図版９・13）

中世の遺構は、中央のⅠ区北側からⅣ区にかけて溝跡３条を検出したのみである。Ⅰ・Ⅲ・Ⅳ区の時期不明の溝跡の中には中世に属する可能性を残すものもあるが、遺物が出土していないため明確ではない。遺物は、溝跡から陶器類の破片が少量と砥石、Ⅴ区SX40（SX08）湿地堆積層上部から陶器壺もしくは甕の破片が出土している。





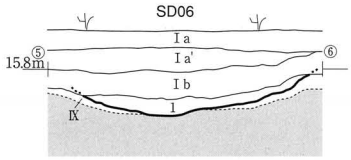


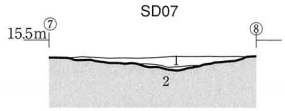
SD05（中央セクション）

層	土　色	土　性	備　考
1	黒褐（10YR3/1）	粘土質シルト	地山粒、酸化鉄少量含む。しまり強い。
2	黒褐（10YR3/2）	粘土質シルト	地山粒、酸化鉄少量含む。しまり強い。
3	黒褐（10YR3/2）	粘土質シルト	地山粒、酸化鉄少量含む。粘性強い。
4	褐（10YR4/4）	粗砂	酸化鉄少量含む。
5	褐灰（10YR4/1）	粘土	地山小ブロック含む。
6	灰黄褐（10YR6/2）	シルト	崩落（流入）土。地山に近似。
7	にぶい黄褐（10YR4/3）	シルト	酸化鉄少量含む。

SD05

層	土　色	土　性	備　考
1	黒褐（10YR2/2）	粘土	ほぼ均質。粘性強い。
2	黒褐（10YR3/2）	粘土	酸化鉄多量含む。
3	オリーブ黒（5Y3/1）	粘土	砂層を縞状に含む。グライ化。
4	褐灰（10YR4/1）	粘土質シルト	にぶい黄色シルトブロックを含む。下半部グライ化。





SD06

層	土　色	土　性	備　考
1	黒褐（10YR3/2）	粘土質シルト	地山粒、炭粒、酸化鉄少量含む。

SD07

層	土　色	土　性	備　考
1	黒褐（10YR3/1）	粘土質シルト	酸化鉄少量含む。
2	黒（10YR2/1）	粘土質シルト	黒色粘土層含む。1層より粘性強い。

第19図　中世の遺構（Ⅰ・Ⅳ区）

2）遺構と遺物

A. 溝跡

【SD05・SD06】（第19図・第20図、図版９・13）

Ⅰ区北側～Ⅳ区にかけて位置する。SD05は南側が」形に西へ屈曲し、北側は東へ曲がりながら延びている。SD06はSD05の南の屈曲部分に接続する。SD05はSD07溝跡と重複し、これよりも新しい。

SD05は上幅1.2～2.5m・下幅0.7～0.9m、深さは35～40cmほどである。断面形はU字形～逆台形状を呈する。堆積土は黒褐～褐色粘土質シルトなどを主体とする自然堆積土である。

SD06はごく一部検出されたのみであるが、上幅1.7～1.8m・下幅0.5～0.7m、深さ30～35cmほどで、SD06よりも浅い。断面形は浅いU字形を呈する。堆積土は黒褐色粘土質シルトを主体とする自然堆積土である。

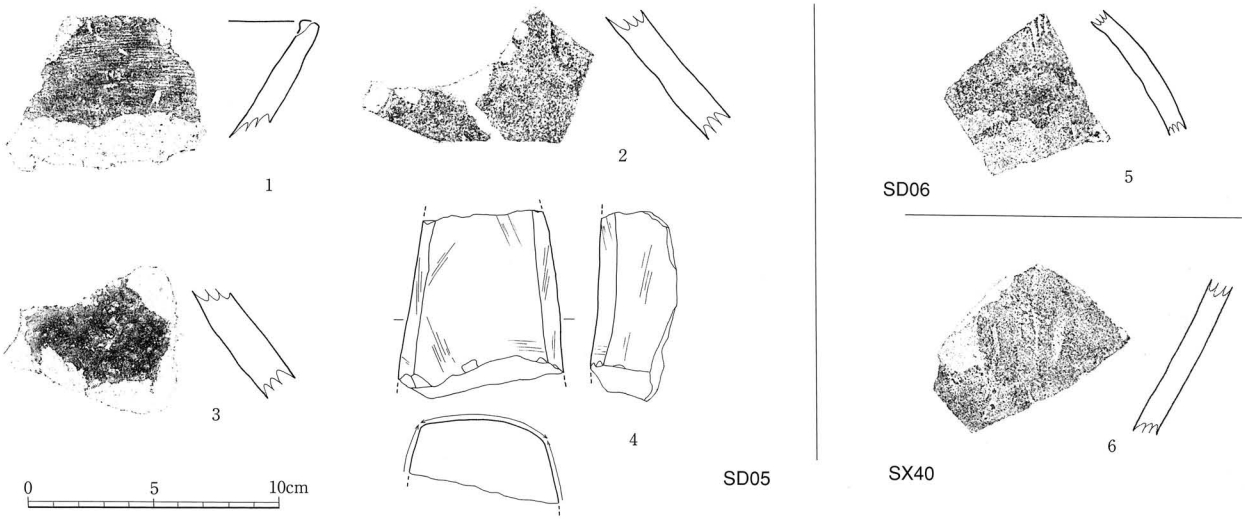
遺物は、SD05堆積土から陶器鉢（第20図－１）・壺もしくは甕の破片（第20図－２・３）、砥石（第20図－４）など、SD06堆積土から陶器壺もしくは甕の破片（第20図－５）が出土した。

【SD07】（第19図・第20図、図版９）

Ⅰ区北側に位置する。「 形に屈曲し、東端は調査区外へと延びている。SD05溝跡、SX08湿地（古墳時代前期）と重複し、SD05よりも古く、SX08よりも新しい。

規模は上幅0.9～1.1m・下幅0.7～1.0m、深さが10～15cmほどである。断面形は皿状を呈する。堆積土は黒褐色粘土質シルトを主体とする自然堆積土である。

遺物は、古墳時代の土師器片が少量出土したのみである。



No.	器種	遺構／層	残存	法量（cm） 口径	底径	器高	特徴	写真図版	登録
1	陶器　鉢	Ⅰ区SD05　堆	口縁部	－	－	－	在地産　内外：ヨコナデ　胎土：灰色	13-12	陶2
2	陶器　甕or壺	Ⅰ区SD05　堆	胴部片	－	－	－	産地不明　外：自然釉　内：ナデ　胎土：灰色	13-13	陶4
3	陶器　甕or壺	Ⅰ区SD05　堆	胴部片	－	－	－	常滑産　外：自然釉　内：ナデ　胎土：褐灰色	13-14	陶1
4	砥石	Ⅰ区SD05　堆	欠損品	砂岩製　残存長：(7.5) cm　残存幅：(6.5) cm　残存厚：(3.3) cm				13-17	石1
5	陶器　甕or壺	Ⅰ区SD06　堆	胴部片	－	－	－	常滑産　外：一部自然釉　内：ナデ　胎土：灰～灰オリーブ色	13-15	陶5
6	陶器　甕or壺	Ⅳ区SX40　堆上	胴部片	－	－	－	産地不明　内外：ナデ　胎土：にぶい橙色	13-16	陶15

第20図　中世の遺物

(3) 近世・近代以降（時期不明を含む）

1）検出状況（第21図、図版９）

調査区東側のⅢ区では柱穴跡、溝跡（大溝跡を含む）、井戸跡、土坑などを多数検出した。これらの遺構は限られた範囲に密に分布しており、それぞれの重複関係も著しい。遺構の埋土および堆積土はⅠb層などを起源とする褐色～暗褐色土を含んでおり、遺構からは少量ではあるが近世・近代以降の陶磁器類が出土している。また、Ⅰ区中央の調査区東壁際では近世墓が検出されている。

これらの遺構の大半については平面上での確認であり、遺構の掘り下げは一部の柱穴跡や溝跡・井戸跡などに限定している。以下の検出遺構や遺物の説明は、簡単な記述にとどめておく。

2）遺構と遺物

A. 掘立柱建物跡

Ⅲ区に多数の柱穴が集中して分布しており、特に調査区（Ｌ字形）の中央付近に多い。少なくとも10棟以上の掘立柱建物跡になるとみられる。柱穴には隅丸方形状～楕円形状のものがあり、一辺もしくは径が50cm～80cmほどのものが多い。柱穴の多くには径12～15cmほどの円形状の柱痕跡が認められる。柱穴掘り方埋土は大きく二つに分けられ、地山ブロックを含む暗褐色土主体のものと黒褐色土主体のものがある。柱穴には重複関係が多く認められるが、概ね前者が後者よりも新しいようである。

B. 大溝跡・溝跡

Ⅰ・Ⅲ・Ⅳ区で東西方向あるいは南北方向に延びている溝跡のうち、Ⅰ区ではSD01・SD04、Ⅲ区ではSD20～24・36・37、Ⅳ区ではSD15～17などである。これらのうち、Ⅲ区の北側で検出されたSD20は上幅約４ｍ・深さ1.3ｍと規模が大きく、また、おなじⅢ区の逆Ｌ字に屈曲するSD36も比較的規模が大きく、上幅1.6ｍ・深さ0.4ｍほどある。SD20からは唐津産の向付（第22図－１）、碗（第22図－２）などの近世陶磁器、石鉢（第22図－３）などが出土している。このSD20大溝跡より以南に近世以降の遺構が集中することからすると、この大溝跡は近世屋敷の区画溝になる可能性が高いと考えられる。SD32や他の溝跡からは年代がわかる遺物がほとんど出土していないが、これらの溝跡はいずれも近世以降のものとみられる。なお、Ⅲ区東端のSD37からは近代以降の磁器が出土しており、ほかの溝跡よりも一時期新しいものである。

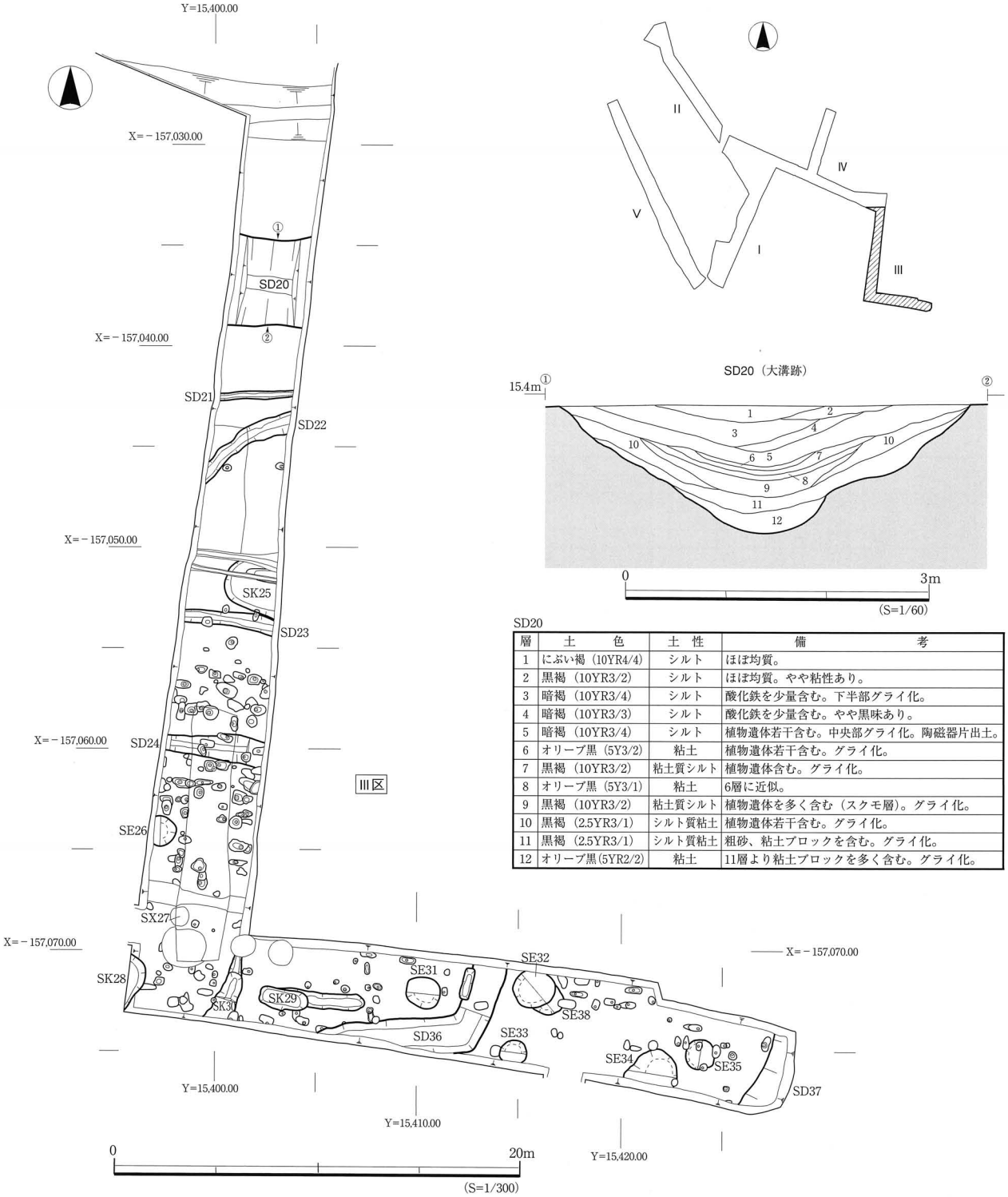
C. 井戸跡

Ⅲ区で８基検出されている。すべて半割したが（一部のみ底面まで）、いずれも素掘りのものである。径1.3ｍ～1.8ｍで、深さは1.2ｍ以上ある。遺物はほとんど出土せず、SE32からのみ近世磁器Ⅲの小破片が出土した。

D. 墓壙

近世墓がⅠ区中央付近で検出された（第５図）。少なくとも10基以上あるとみられる。確認面で骨

片や副葬品とみられる陶磁器小坏（第22図－４・５）・銭貨(寛永通宝)（第22図－６～８）などが出土している（これらの墓壙については精査を行っていない）。



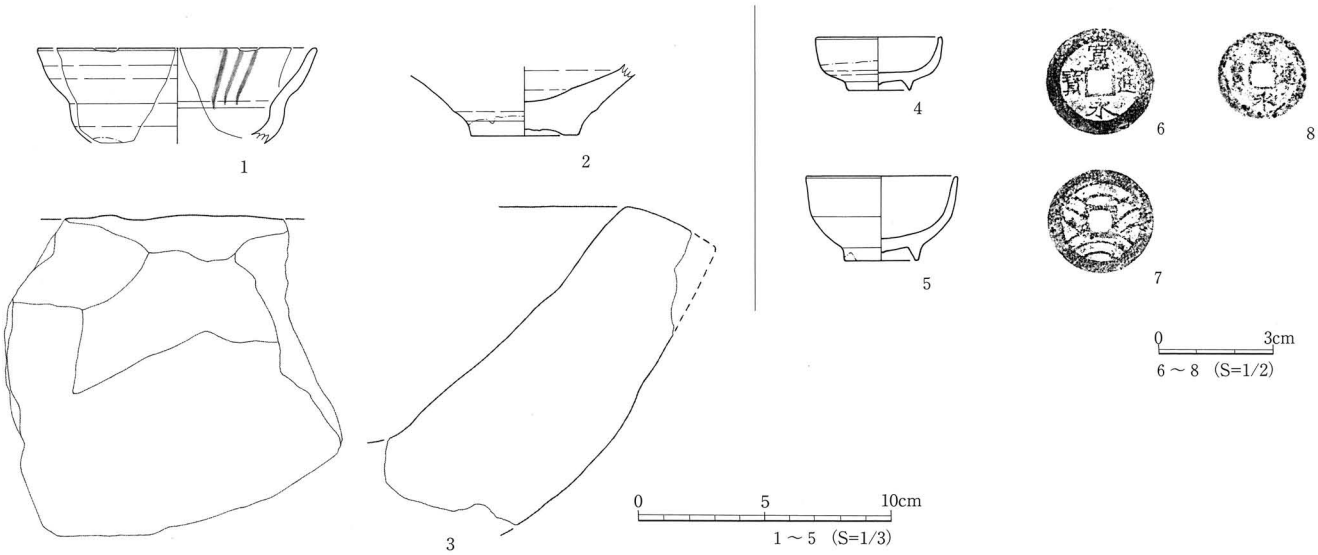
SD20

層	土　色	土 性	備　考
1	にぶい褐（10YR4/4）	シルト	ほぼ均質。
2	黒褐（10YR3/2）	シルト	ほぼ均質。やや粘性あり。
3	暗褐（10YR3/4）	シルト	酸化鉄を少量含む。下半部グライ化。
4	暗褐（10YR3/3）	シルト	酸化鉄を少量含む。やや黒味あり。
5	暗褐（10YR3/4）	シルト	植物遺体若干含む。中央部グライ化。陶磁器片出土。
6	オリーブ黒（5Y3/2）	粘土	植物遺体若干含む。グライ化。
7	黒褐（10YR3/2）	粘土質シルト	植物遺体含む。グライ化。
8	オリーブ黒（5Y3/1）	粘土	6層に近似。
9	黒褐（10YR3/2）	粘土質シルト	植物遺体を多く含む（スクモ層）。グライ化。
10	黒褐（2.5YR3/1）	シルト質粘土	植物遺体若干含む。グライ化。
11	黒褐（2.5YR3/1）	シルト質粘土	粗砂、粘土ブロックを含む。グライ化。
12	オリーブ黒(5YR2/2)	粘土	11層より粘土ブロックを多く含む。グライ化。

第21図　近世・近代以降の遺構（Ⅲ区）

E. 土坑

Ⅲ区中央付近では大小の土坑が数基検出されている。これらのうち、SK25やSK29からは近世陶磁器の小破片が出土した。

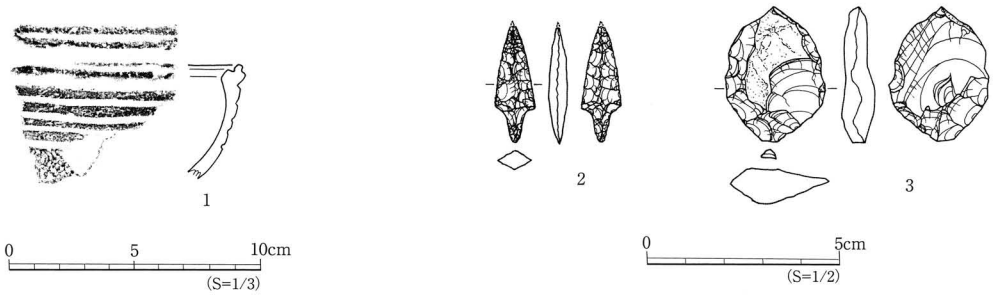


No.	器種	遺構／層	残存	法量(cm) 口径	底径	器高	特徴	写真図版	登録
1	陶器 向付	Ⅲ区SD20 堆5	口縁部一部	(11.0)	－	－	唐津産 鉄絵 灰釉 17c	13-18	陶6
2	陶器 碗	Ⅲ区SD20 堆5	底部一部	－	4.3	－	削り出し高台 灰釉	13-19	陶7
3	石鉢	Ⅲ区SD20 堆9	一部	－	－	－	砂岩製 被熱か		石6
4	磁器 小坏	Ⅰ区 近世墓	完形	4.9	2.5	2.1	体部下～底部：露胎	13-20	磁3
5	陶器 小坏	Ⅰ区 近世墓	完形	5.9	2.9	3.3	上野目産ヵ 灰釉	13-21	陶18
6	寛永通宝	Ⅰ区 近世墓	完形	新寛永 径:28.8mm 三枚付着（銭1～3）のうちの一枚				13-22	銭1
7	寛永通宝	Ⅰ区 近世墓	完形	新寛永 四文銭 径：28.1mm 三枚付着（銭1～3）のうちの一枚（ウラ面）				13-23	銭3
8	寛永通宝	Ⅰ区 近世墓	完形	新寛永 径:23.8mm 二枚付着（銭4･5）のうちの一枚				13-24	銭4

第22図 近世の遺物

(4) その他

Ⅲ・Ⅳ区の表土層や古墳時代の遺構堆積土から、縄文時代の土器片や石器（第23図－１～３）がごく少量出土している。１は縄文時代晩期（大洞Ａ式）の浅鉢の口縁部片、２は碧玉製の石鏃、３は頁岩製の小型尖頭器である。



No.	器種	遺構／層	残存	法量(cm) 口径	底径	器高	特徴	写真図版	登録
1	縄文土器 浅鉢	Ⅳ区 表土	口縁部	－	－	－	晩期：大洞A式 両面漆塗ヵ	13-25	縄3
2	石鏃	Ⅲ区 遺確時	ほぼ完	碧玉製 器長：3.1cm 器幅：1.0cm 器厚：0.5cm 基部両面に微量の黒色付着物				13-26	石9
3	小型尖頭器	Ⅳ区 表土	完形	頁岩製 器長：3.5cm 器幅：2.5cm 器厚：0.9cm				13-27	石11

第23図 縄文時代の遺物

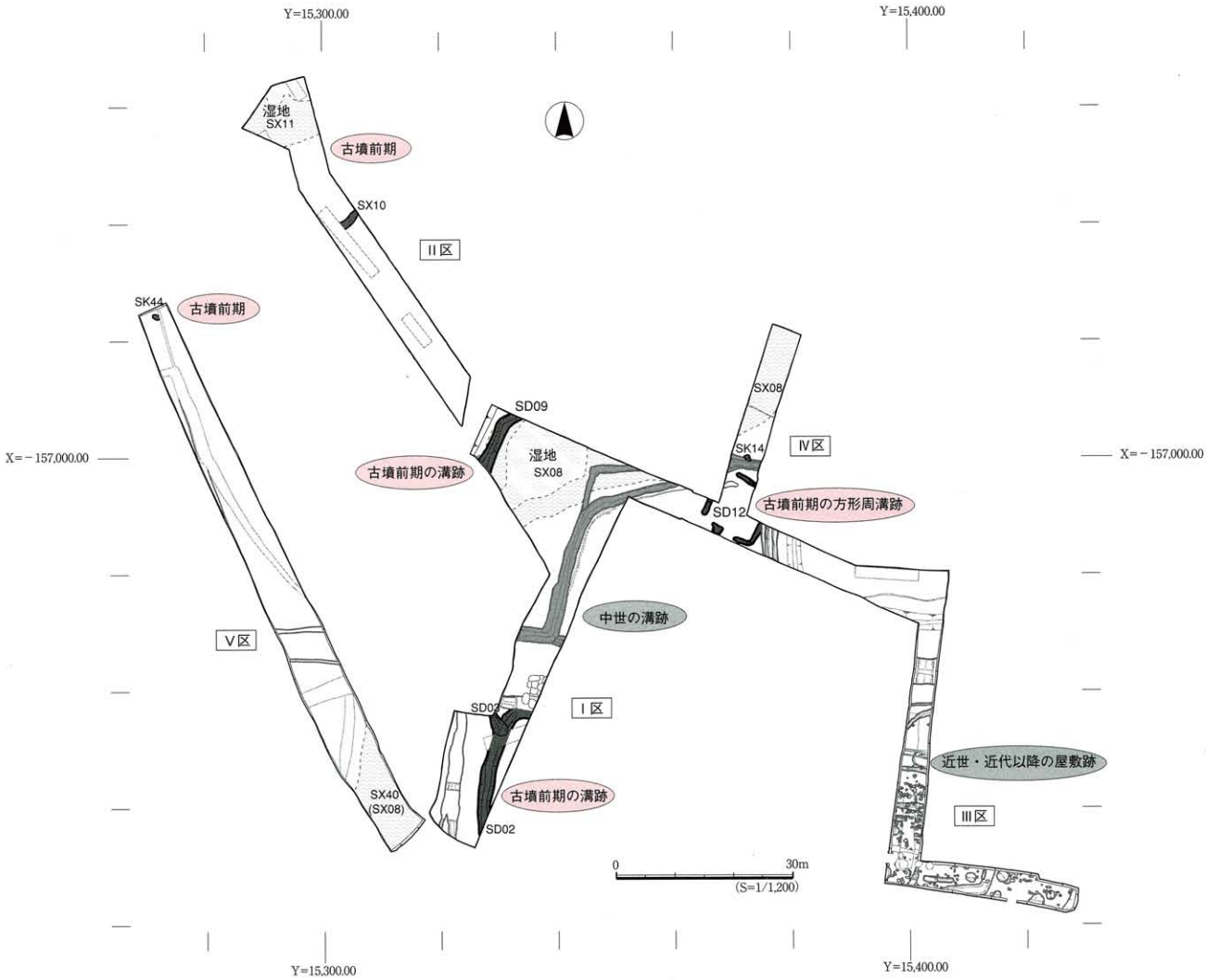
第Ⅳ章　総　括

今回の発掘調査は、美里町中埣西部地区の県営「ほ場整備事業」に伴う調査であり、水路および道路新設区域を対象としたものである。調査では古墳時代前期の方形周溝跡や溝跡、土坑、湿地などが検出され、他に中世の溝跡、近世・近代以降の屋敷跡とみられる遺構群などが確認された（第24図）。ただ、狭長なトレンチ状の調査区であることから、遺構は部分的な検出に留まり、全体的な状況を把握することは難しい。ここでは主要な古墳時代前期の遺構・遺物を中心にその要点をまとめ、その他の時期については最後に若干触れておきたい。

1．古墳時代（前期）

(1) 出土土器とその年代的位置づけ

古墳時代前期の土器類は、東側のⅢ区を除いた広範な区域から出土している。第25図に出土土器の一覧を示した。これらはいずれも前期：塩釜式（氏家 1957）の特徴をもつものであるが、時期的にはやや幅がありそうである。比較的一括性のある一群は、SD12方形周溝跡出土土器類、SD09溝跡出



第24図　各期の遺構分布図

土土器類である。

SD12出土土器には土師器器台・鉢・壺・甕・台付甕・有孔鉢がある。器台には透孔（３孔）をもつもの、受部と脚部の間に貫通孔のないものがある。鉢には体部が半球形で丸底のいわゆる小型丸底鉢、体部が内碗して立ちあがる平底のものなどが含まれている。壺には平底で球形に近くやや扁平な胴部をもつ小型壺のほかに、肩部に斜格子状の沈線文が施された大型壺がある。甕類はいずれも中型品で、胴部は丸みをもち、口縁部がくの字状に屈曲し外反するものが主体である。胴部の調整はハケメ調整が基本で、底部にはその中央が窪むいわゆる「輪台技法」が認められる。有孔鉢は浅鉢状の形態で、外面にはハケメ調整が施されている。

SD09出土土器には土師器器台・壺・甕・台付甕などがある。器台には口縁部が垂直に立ち上がる受部、貫通孔のない脚部がある。壺には有段口縁で胴部が球形のもの、口縁部が外反し胴部が球形のもの、複合口縁のものなどがある。甕類はSD12出土のものとほぼ同様である。他にハの字に開く台付甕の台部が含まれている。

これら以外では、SX08湿地から赤彩の施された器台や鉢・壺、SX11湿地から頸部に隆帯のある壺、Ⅰ区（遺構確認時）から高坏の棒状脚などが出土している。

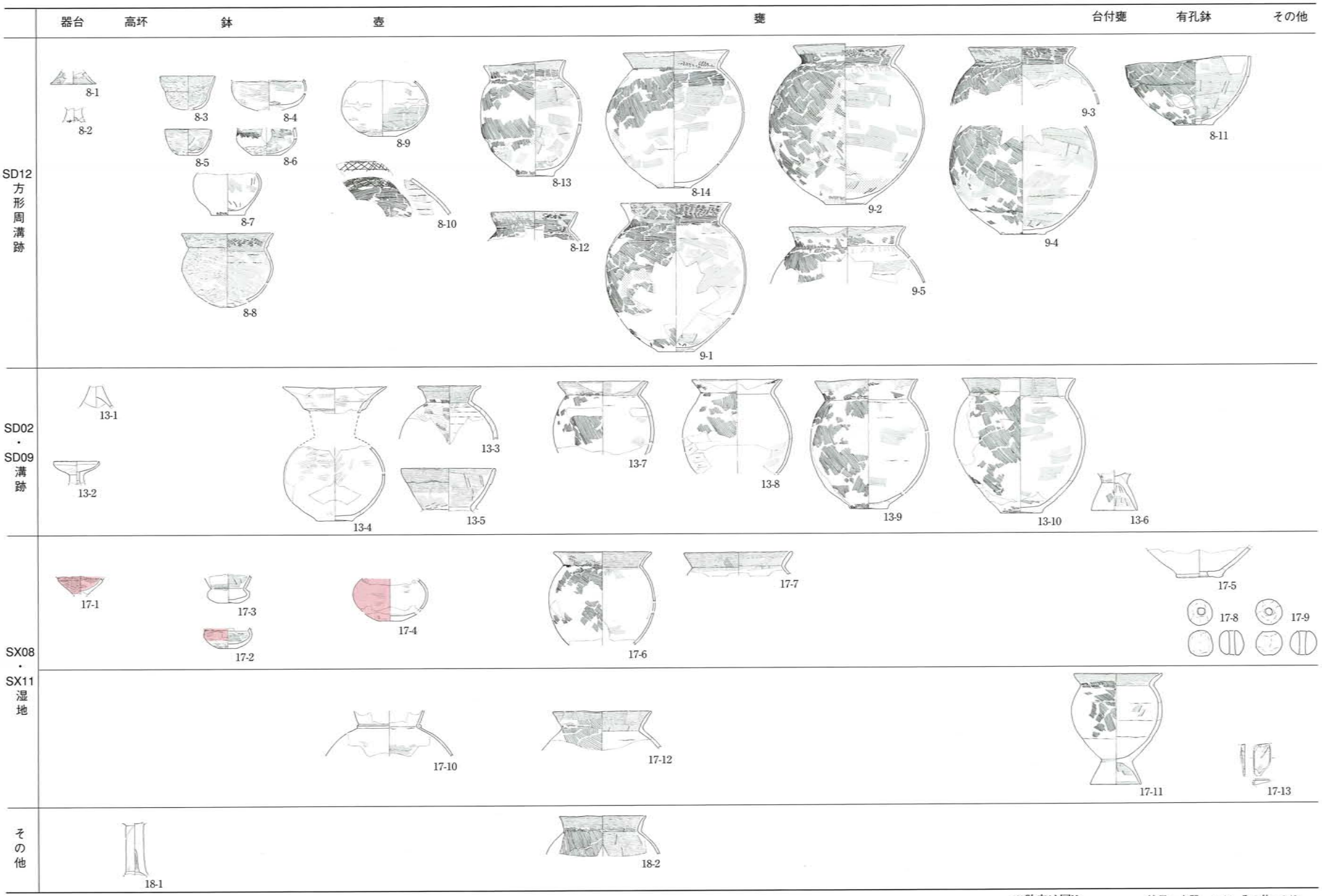
さて、これらの土器群の時期的位置づけについて検討してみたい。前期塩釜式土器の編年についてはこれまでに丹羽、次山、辻の各氏の論考（丹羽 1985、次山 1992、辻 1995）などがあり、細部の相違を除けばその枠組みは概ね共通している。辻氏はⅠ～Ⅲ期に大別し、各２～４段階に細別しているが（辻 1995）、これを参考にSD12やSD09出土資料をみると、透孔をもつ器台や貫通孔のない器台、小型丸底鉢の形態、有段口縁壺、ハケメ調整を基本とする胴部球形の甕類などは、辻編年のⅡ期後半からⅢ期段階の幅の中に位置づけられるものである。ただし、形態の簡略化や調整の粗雑化が進むⅢ期終末段階の特徴を示す資料は見当たらないので、この段階までは降らないとみられる。いずれにしても、SD12やSD09出土資料は年代をより反映する器台や高坏・鉢・壺などの小型精製土器類の出土数が少なく、しかも全体形が分かる資料もわずかであることから、これ以上の限定は難しい。

また、他の断片的な資料の中には棒状脚の高坏、頸部に隆帯を巡らす壺などがあるが、前者はⅢ期後半、後者はⅡ期の特徴とされる資料である。これらも勘案してみれば、本遺跡の出土土器は塩釜式の中でもおおよそその後半期に属するものと言えそうである。

(2) SD12方形周溝跡の特徴と性格について

Ⅳ区中央付近で検出されたSD12方形周溝跡について、その特徴や性格などについて検討する。

このSD12方形周溝跡は全体を検出してはいないが、周溝を含めたその規模は東西10.6m×南北11.0mほどであり、ほぼ正方形状を呈しているとみられる。周溝は全周せず、少なくとも南辺から西辺部分、北辺部分が途切れている。周溝跡の底面はところどころ土坑状に窪んでおり、一定の深さではなく、周溝の深さは浅いところでは10cm程度しか残存していない部分があることから、全体的に若干削平を受けているとみられる。溝で区画された内部では土坑や柱穴などの遺構は確認されていない。ただ、周溝堆積層の中位よりやや下には地山ブロックを多く含む黄褐色層があることから、これが区



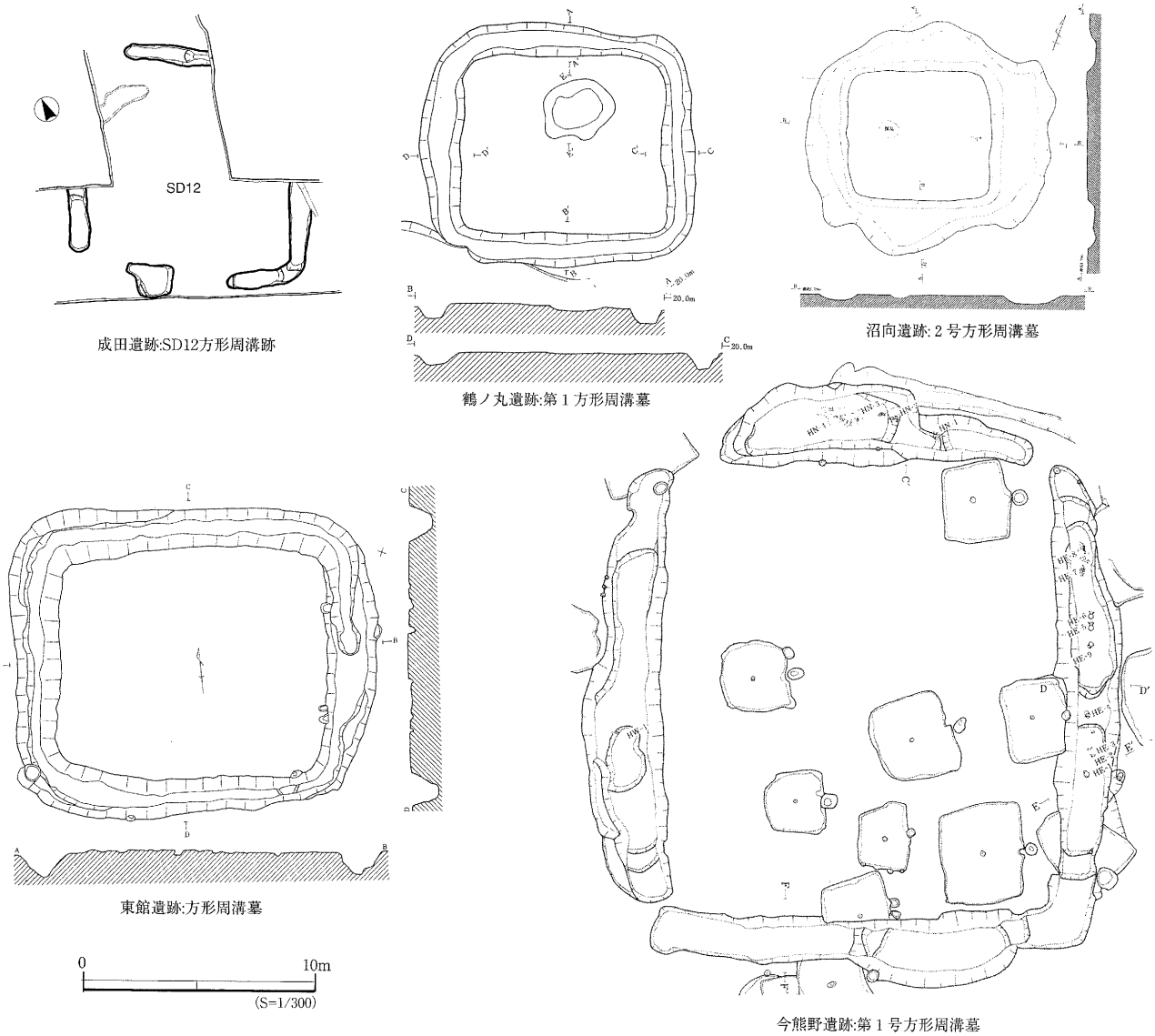
※数字は図No.　　縮尺：土器＝1／9 その他＝1/6

第25図　古墳時代前期の遺物一覧

画内部からの崩落土とすれば、その内部には盛土による高まりが存在した可能性も考えられる。

周溝の堆積土は基本的に自然流入土であるが、底面近くには壁面からの崩落土とみられる層（堆６）と黒褐色シルト層や灰黄褐色シルト層（堆５～堆４）が薄くみられ、後者の層の中に土器類が多く含まれていた。これらの堆積層の上には前述の地山ブロックを多く含む層(堆３)があり、さらにその上部には灰褐色～黒褐色シルト層（堆２～堆１）が堆積している。この上部層からは遺物はほとんど出土していない。なお、第７図を見ても分かるように、前述した土器類の大半はSD12の南半側から出土しており、北半側では土器の集中は認められない。

ところで、古墳時代前期のこうした形態と規模の遺構については県内でも多くの報告例があり（第26図）、栗原市（旧志波姫町）鶴ノ丸遺跡（宮城県教育委員会 1981a）、同市（旧高清水町）東館遺跡（宮城県教育委員会 1980b）名取市今熊野遺跡（宮城県教育委員会 1985）、仙台市沼向遺跡（仙台市教育委員会 2000）など、前期の中でも特に後半段階に集中している（註１）。これらはいずれも「方形周溝墓」とみられている。平面形は方形が主体を占め、規模は10～15m前後のものが多く、周溝は



第26図　SD12方形周溝跡と県内の方形周溝墓

全周するものと南辺や隅が陸橋状に途切れているものがある（宮城県教育委員会 1998）。ただ、区画内部から明確な墓壙（主体部）などが検出された事例はないようである。周溝内からは土師器器台・鉢・高坏・小型壺などの小型精製土器や大型壺・甕・有孔鉢などが出土する場合が多く、大型の方形周溝墓では底部や胴部に穿孔された複合口縁や有段口縁の大型壺などが目立つ。こうした方形周溝墓は数基がまとまって「群」をなす場合が多く、また、居住域からは離れた区域に認められる。

このような検出事例と比較すると、SD12方形周溝跡は「方形周溝墓」とされる遺構に類似している。SD12は少なくとも居住域からは離れた地点にあるとみられ、その形態や規模、周溝内の堆積土や遺物の出土状況などにも共通点がある。したがって、現時点ではSD12を他の事例と同様に「方形周溝墓」としてみるのが妥当と思われる。ただし、SD12のように周溝が途切れる部分が多く、１基のみの検出という点では他の事例とはやや違いがあり、また、今回の調査ではほかに「墓」とみなしうる遺構や遺物が検出されていないという点を重視すれば、SD12を「墓」といった性格のみに限定することなく、たとえば、他の祭祀や儀礼などに伴う施設（区画）としての性格も考慮する必要があるかもしれない。

(3) 古墳時代前期の遺構群の広がりについて

遺跡が所在する自然堤防上は、開田による削平などでほぼ平坦な地形になっているが、その微地形をみると、周辺よりやや高い微高地とより低い低地部（比高差１～1.5m）から形成されていることがわかる。今回の調査区でもその範囲に微高地と低地部（湿地２ヶ所：SX08・SX11）を含んでいる。こうした地形と2005年度の確認調査の結果も合わせてみると、古墳時代前期の遺構はSX08湿地の東・北側区域とSX11の南側区域の微高地に広がることが予想される。その範囲は少なくとも東西200m・南北200mと推定される。

ところで、今回の調査区では「方形周溝墓」の可能性があるSD12方形周溝跡を検出したが、竪穴住居跡は未確認である。仮にSD12がある付近が墓域とすると、居住域はやや離れた場所にある可能性が高いと考えられる。この場合、前期の居住域が形成されていた区域は南側のSD02が展開する付近か（註２）、さらに離れた南西側の微高地（第３図のＡ地点より西側）もしくは北東側の微高地（Ｃ地点の東側：長岡針遺跡）付近になるのではないかと推測される。

２．中世

中世の遺構や遺物は中央のⅠ・Ⅳ区とⅤ区東側において確認されているが、遺構はわずかにⅠ・Ⅳ区のSD05～SD07溝跡３条のみであり、また、遺物はこれらの溝跡やⅤ区のSX40（SX08）湿地堆積層上部から少量出土しているのみである。中世期の遺構群は、付近の地形や遺構・遺物の分布からするとⅠ区以東に分布する可能性があるものの、今回の調査では明らかにできなかった。

３．近世・近代以降

東側のⅢ区においてのみ、掘立柱建物跡や井戸跡、溝跡などが密集して検出されているが、付近か

らは近世陶磁器、近代以降の陶磁器が出土しており、遺構の掘り込み面も近世以降とみられる暗褐色土（Ⅰb層）上からなので、これらの遺構はいずれも近世・近代以降と考えられる。また、これらは北側のSD20大溝跡を境にこれより北には全く分布していないことや、一部区域に建物跡や井戸跡が密集することなどから考えると、Ⅲ区の遺構群はSD20大溝跡によって区画された近世・近代以降の屋敷跡に関わるものではないかと推測される。すぐ西側のⅠ区に近世以降の墓壙群があるが、この屋敷に関連する可能性がある。

註

1）前半段階に位置づけられる例には、石巻市新山崎遺跡（石巻市教育委員会 2000）、仙台市藤田新田遺跡（宮城県教育委員会 1994）などがある。

2）SD02溝跡は、その形状・規模からみれば、集落を取り囲む「区画溝」としての可能性も考慮する必要があるが、出土遺物がわずかであるという状況から居住域に近い溝跡とは考えにくい点もある。

引用・参考文献

石巻市教育委員会　2000『新山崎遺跡－蛇田地区農業農村整備事業に伴う発掘調査報告書－』石巻市文化財調査報告書第８集

2003『新金沼遺跡－高規格道路「三陸自動車道」建設に伴う発掘調査報告書－』石巻市文化財調査報告書第11集

氏家和典　1957「東北土師器の型式分類とその編年」『歴史』第14輯 pp.1～14

小牛田町教育委員会　1976『山前遺跡』

仙台市教育委員会　1996『中在家南遺跡他』仙台市文化財調査報告書第213集

2000『沼向遺跡第１～３次調査－宮城県仙台港背後地土地区画整理事業関係遺跡発掘調査報告書Ⅰ－』仙台市文化財調査報告書第241集

田尻町教育委員会　2001『新田柵跡推定地４』田尻町文化財調査報告書第６集

次山　淳　1992「塩釜式土器の変遷とその位置づけ」『究班』埋蔵文化財研究会15周年記念論文集 pp.235～248

辻　秀人　1989「東北南部における古墳出現期の土器編年 その１ 会津盆地」『東北学院大学論集 歴史学 地理学』第26号 pp.105～140

1995「東北南部における古墳出現期の土器編年 その２」『東北学院大学論集 歴史学 地理学』第27号　pp.39～88

日本考古学協会編　1993『シンポジウム２ 東日本における古墳出現過程の再検討』日本考古学協会 1993年度新潟大会資料

迫町教育委員会　1995『佐沼城跡－近世武家屋敷と古代の集落跡－』迫町文化財調査報告書第２集

古川市教育委員会　1999『留沼遺跡』宮城県古川市文化財調査報告書第25集

宮城県教育委員会　1980a「留沼遺跡」『東北新幹線関係遺跡調査報告書Ⅲ』宮城県文化財調査報告書第65集

1980b「東館遺跡」『東北新幹線関係遺跡調査報告書Ⅲ』宮城県文化財調査報告書第65集

1981a「鶴ノ丸遺跡」『東北新幹線関係遺跡調査報告書－Ⅴ－』宮城県文化財調査報告書第77集

1981b「日向前横穴墓群」『東北新幹線関係遺跡調査報告書－Ⅴ－』宮城県文化財調査報告書第77集

1985「今熊野遺跡」『今熊野遺跡・一本杉遺跡・馬越石塚』宮城県文化財調査報告書第104集

1992『野田山遺跡』宮城県文化財調査報告書第145集

1994『藤田新田遺跡』宮城県文化財調査報告書第163集

1998『山王遺跡町地区の調査－県道泉塩釜線関連調査報告書Ⅱ－』宮城県文化財調査報告書第175集

2003「山王遺跡」『壇の越遺跡ほか』宮城県文化財調査報告書第195集

写　真　図　版

1．成田遺跡の空中写真（上が北）

国土交通省：国土画像情報（昭和50年撮影
カラー空中写真、整理番号：CTO-75-27-c8b-1）
縮尺：約1/12,000

2．遺跡近景（南より）

図版１　成田遺跡の空中写真および近景

1．Ⅰ区南側全景（南から）

2．Ⅰ区北側全景（東から）

3．Ⅱ区全景（南東から）

図版２　Ⅰ・Ⅱ区の調査区

1．Ⅲ区西側全景（南から）

2．Ⅳ区西側全景（南から）

3．Ⅴ区全景（北西から）

図版３　Ⅲ～Ⅴ区の調査区

1．SD12方形周溝跡（南東から）

2．SD12a土器出土状況（南から）

3．SD12c土器出土状況（南から）

4．SD12c有孔鉢出土状況（南から）

5．SD12c甕出土状況（南から）

6．SD12a断面（南から）

7．SD12c断面（南から）

図版４　古墳時代前期の遺構（1）　　Ⅳ区：SD12方形周溝跡

1．SD12d（SK13）（南から）

2．SD12d（SK13）土器出土状況（南から）

3．SD12d（SK13）鹿角出土状況（南から）

4．SD12d（SK13）南北断面（東から）

5．SD12c西端（SK19）（南から）

6．SD12c西端（SK19）土器出土状況（南から）

7．SD12完掘状況（南東から）

図版５　古墳時代前期の遺構（2）　Ⅳ区：SD12方形周溝跡

1．SD02溝跡（南から）

2．SD02・03溝跡交差部分（南から）

3．SD02・03交差部分断面（北から）

4．SD09溝跡検出状況（南から）

図版６　古墳時代前期の遺構（3）　　Ⅰ区：SD02・03・09溝跡

1．SD09溝跡
南半部掘り下げ状況（南から）

2．SD09土器出土状況

3．SD09土器出土状況

4．SD09完掘状況（南から）

図版７　古墳時代前期の遺構（4）　　Ⅰ区：SD09溝跡

1．Ⅳ区SK14土坑（南から）

2．Ⅴ区SK44土坑（南から）

3．Ⅰ区SX08湿地の黒褐色土の広がり（西から）

4．Ⅰ区SX08湿地の断面（南西から）

5．Ⅴ区SX40（SX08）湿地（南東から）

6．Ⅴ区SX40（SX08）断面部分（南西から）

7．Ⅱ区SX11湿地（南から）

8．Ⅱ区SX11湿地土器出土状況

図版８　古墳時代前期の遺構（5）

Ⅰ区：SX08、Ⅱ区：SX11、Ⅳ区：SK14
Ⅴ区：SX40・SK44

1．Ⅰ区SD05・06溝跡（南から）

2．Ⅰ区SD05・07溝跡（南から）

3．Ⅳ区SD05溝跡（西から）

4．Ⅳ区SD15～17溝跡（南東から）

5．Ⅲ区南側全景（西から）

6．Ⅲ区西側柱穴群（西から）

7．Ⅲ区南西側（南から）

8．Ⅲ区SD20溝跡（西から）

図版９　中世、近世・近代以降、その他の遺構

Ⅰ区：SD05・07溝跡、Ⅲ区：SD20溝跡ほか、
Ⅳ区：SD15～17溝跡

1～14：SD12方形周溝跡

1・2：土師器器台　3～7・9：土師器鉢　10・11：土師器壺
12：土師器有孔鉢　8・13・14：土師器甕

S＝1/3　（　）は図No.

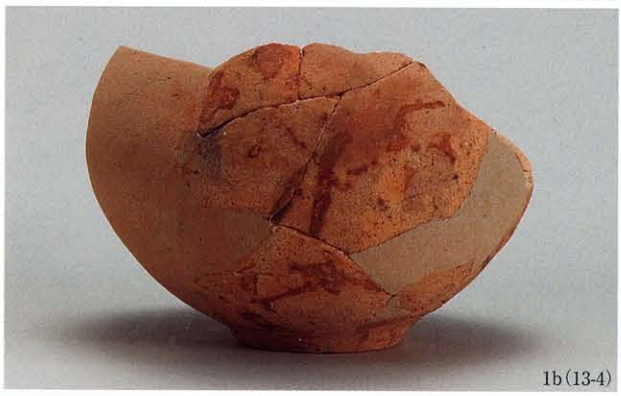
図版10　古墳時代前期の遺物（1）

1～5：SD12方形周溝跡　6：SD02溝跡　7～9：SD09溝跡　1～5：土師器甕　6・7：土師器器台　8・9：土師器壺

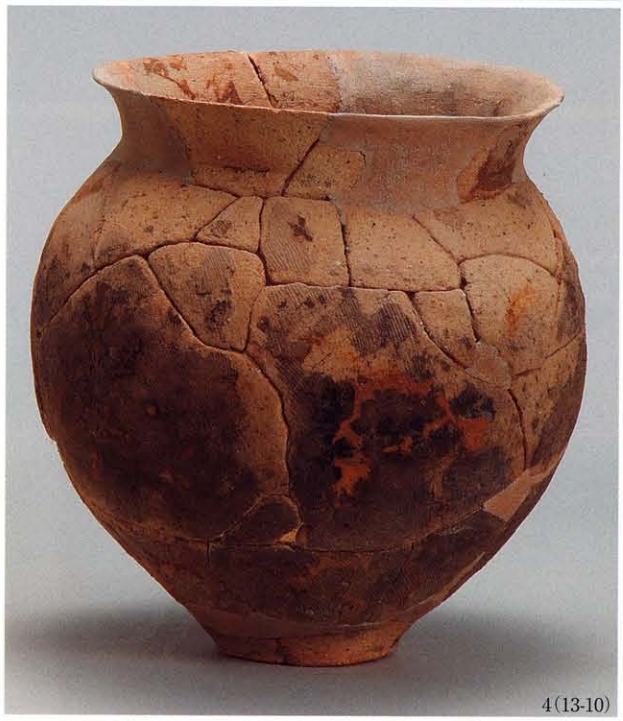
S＝1/3　（　）は図No.

図版11　古墳時代前期の遺物（2）

1a(13-4)


1b(13-4)

2(13-7)


4(13-10)

3(13-8)

5(13-9)

6(13-6)

7(17-1)

8(17-2)

9(17-3)

10(17-4)

1～6：SD09溝跡　7～10：SX08湿地

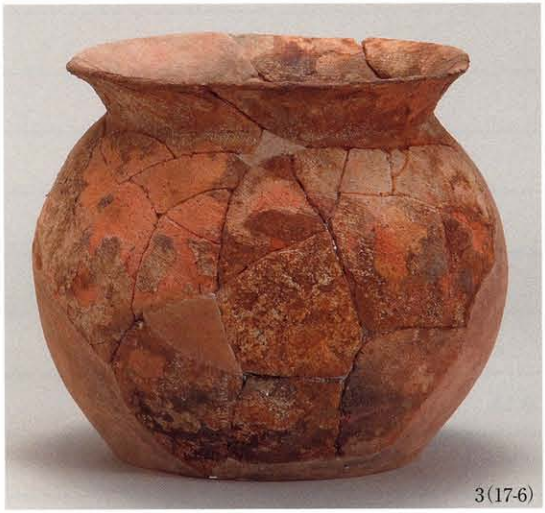
1・10：土師器壺　2～5：土師器甕　6：土師器台付甕
7：土師器器台　8・9：土師器鉢　S＝1/3　（　）は図No.

図版12　古墳時代前期の遺物（3）

1(17-5)

2(17-7)

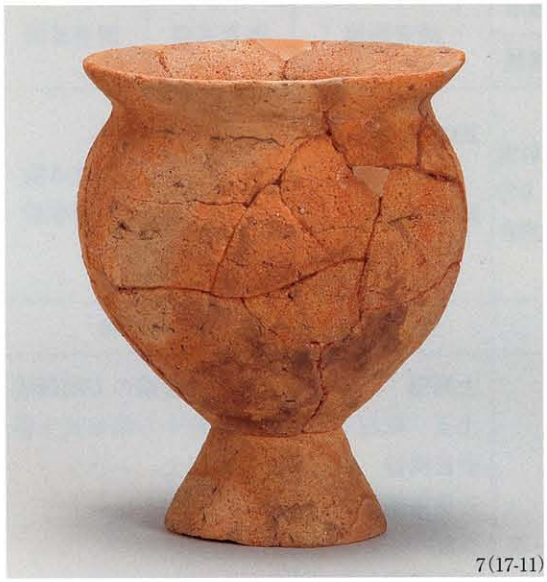
4(17-8) 5(17-9)


3(17-6)

6(17-10)

9(17-13)

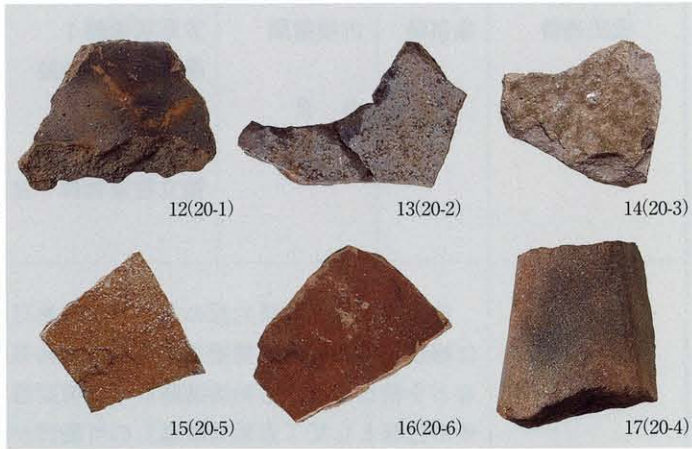
8(17-12)


7(17-11)

10(18-1)

11(18-2)

《古墳前期》1～5：SX08湿地　6～9：SX11湿地　10・11：表土
1：土師器有孔鉢　2・3・8・11：土師器甕
4・5：土玉　6：土師器壺　10：土師器高坏


12(20-1) 13(20-2) 14(20-3)
15(20-5) 16(20-6) 17(20-4)

《中世》12～14・17：SD05溝跡　15：SD06溝跡　12：陶器鉢
16：SX40湿地　13～16：陶器甕or壺
17：砥石

18(23-1)

20(23-4)

19(23-2)

21(23-5)

22(23-6) 23(23-7) 24(23-8)

《近世》18・19：SD20溝跡　20～24：近世墓
18：陶器向付　19：陶器碗　20：磁器小坏
21：陶器小坏　22～24：寛永通宝

25(23-1) 26(23-2) 27(23-3)

《縄文》25～27：表土ほか　25：縄文土器浅鉢　26：石鏃　27：小型尖頭器

4・5・9・22～24・26・27：S＝1/2、他はS＝1/3　（　）は図No.

図版13　古墳時代前期（4）、中世・近世、縄文時代の遺物

報告書抄録

ふりがな	なりたいせき
書名	成田遺跡
副書名	
巻次	
シリーズ名	美里町文化財調査報告書
シリーズ番号	第4集
編著者名	岩渕竜也　佐久間光平
編集機関	美里町教育委員会
所在地	〒987－8602　宮城県遠田郡美里町北浦字駒米13　　TEL　0229－33－2175
発行年月日	西暦2008年3月25日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		世界測地系		調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	北緯	東経			
成田遺跡（なりた）	宮城県遠田郡（みやぎけんとおだぐん） 美里町（みさとまち） 中埣字成田（なかぞねあざなりた）	045055	39051	38度 35分 18秒	141度 0分 23秒	2005.10.31 ～11.02 2006.08.28 ～11.21	700㎡ 2,800㎡	県営ほ場 整備事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
成田遺跡	集落跡	古墳前期 中　世 近　世	方形周溝跡1 溝跡3　湿地跡 溝跡3 大溝跡1 掘立柱建物群　井戸跡	土師器 土玉　砥石 中世陶器　砥石 近世陶磁器 石鉢 寛永通宝	古墳時代前期の方形周溝跡や溝跡から塩釜式土器が多数出土。

要約	成田遺跡は宮城県北部の美里町中埣地区に所在し、江合川流域の自然堤防上にある。県営ほ場整備事業に伴い発掘調査を行った結果、古墳時代前期の方形周溝跡、溝跡、土坑、湿地などを検出した。方形周溝跡からは前期塩釜式土器がややまとまって出土した。この遺構はその性格として「方形周溝墓」の可能性が考えられる。 ほかに、中世の溝跡や近世・近代以降の屋敷跡と推定される遺構群が検出された。

美里町文化財調査報告書第４集

成　田　遺　跡

平成20年３月21日印刷
平成20年３月25日発行

発　行　美里町教育委員会
宮城県遠田郡美里町北浦字駒米13
印　刷　株式会社　東北プリント
仙台市青葉区立町24－24